

2章 キャンパスの現状と課題

2-1 キャンパスの現状

熊本大学の主要5キャンパスの現状として、各キャンパスの位置や概要、歴史的環境について整理する。

(1) 学生・教職員数等

表 2-1 学生・生徒・児童及び幼児数

■学部	
文学部	770
教育学部	1,288
法学部	923
理学部	812
医学部	1,342
薬学部	500
工学部	2,419
合計	8,054
外国人留学生を含む	
■大学院	
教育学研究科(修士)	87
社会文化科学研究科(博士前期)	165
社会文化科学研究科(博士後期)	80
自然科学研究科(博士前期)	936
自然科学研究科(博士後期)	215
医学教育部(修士)	28
医学教育部(博士)	341
保健学教育部(博士前期)	57
保健学教育部(博士後期)	37
薬学教育部(博士前期)	72
薬学教育部(博士後期)	37
薬学教育部(博士)	28
法曹養成研究科	36
合計	2,119
外国人留学生を含む	
■専攻科	
特別支援教育特別専攻科	20
■別科	
養護教諭特別別科	44
■教育学部附属学校	
小学校	694
中学校	474
特別支援学校	60
幼稚園	123
合計	1,351

(平成27年5月1日現在)

表 2-2 教職員数

■教職員	
文学部	58
教育学部	187
法学部	33
理学部	3
薬学部	13
工学部	42
大学院社会文化科学研究科	14
大学院自然科学研究科	215
大学院生命科学研究部	268
大学院法曹養成研究科	18
発生医学研究所	27
パルスパワー科学研究所	16
大学院先導機構	12
イノベーション推進機構	4
総合情報統括センター	9
グローバル教育カレッジ	4
大学教育機能開発総合研究センター	5
政策創造研究教育センター	5
五高記念館	1
eラーニング推進機構	3
沿岸域環境科学教育研究センター	5
先進マグネシウム国際研究センター	4
生命資源研究・支援センター	18
エイズ学研究センター	8
環境安全センター	1
埋蔵文化財調センター	3
保健センター	5
医学部附属病院	1,232
事務部門	428
合計	2,641

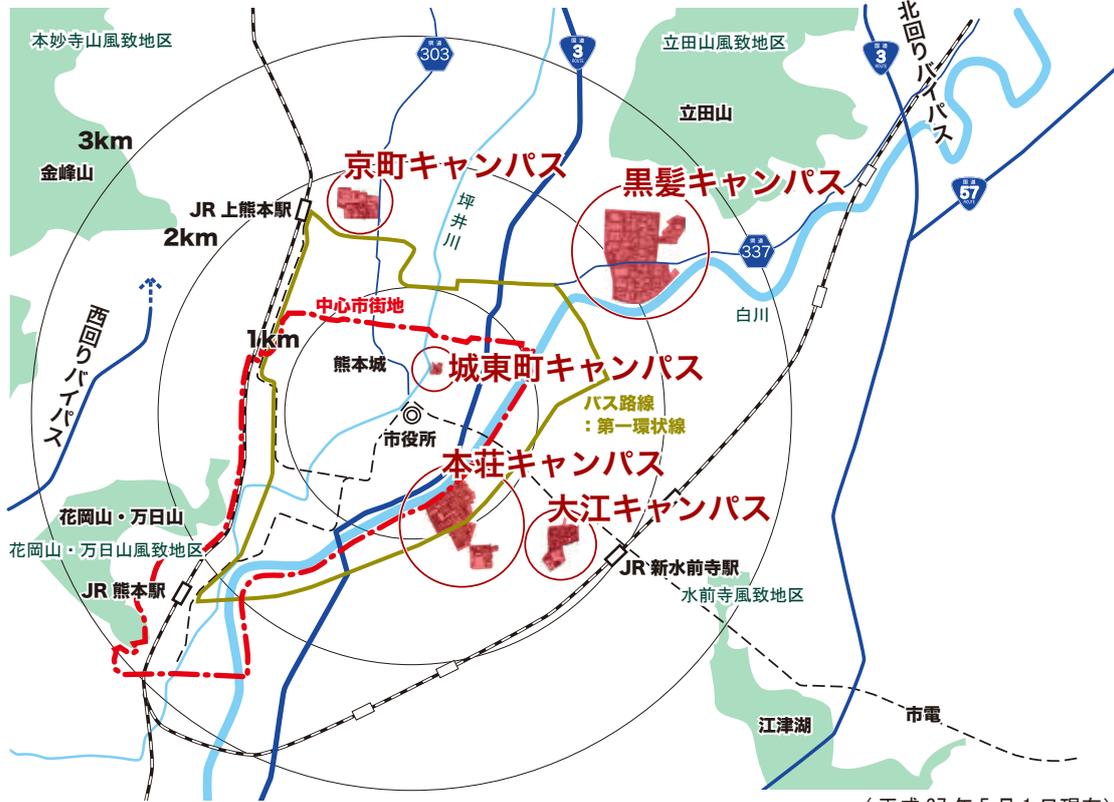
育児休業者等を含む
再雇用職員及び個別契約職員を除く

(平成27年5月1日現在)

2-1 キャンパスの現状

(2) 立地環境等

主要5キャンパスは、熊本市内の中心部（市役所）から2 km 圏内に位置する。5キャンパスの敷地面積合計は55万㎡、建物延床面積は合計43万㎡を有す。



(平成27年5月1日現在)

キャンパス	黒 髪	本 荘	大 江	京 町	城東町
敷地面積	311,478 ㎡	133,312 ㎡	51,264 ㎡	51,547 ㎡	4,632 ㎡
建物延床面積	171,945 ㎡	191,952 ㎡	17,436 ㎡	13,157 ㎡	1,199 ㎡
□組 織	<input type="checkbox"/> 文学部 <input type="checkbox"/> 教育学部 <input type="checkbox"/> 教育学部附属特別支援学校 <input type="checkbox"/> 法学部 <input type="checkbox"/> 理学部 <input type="checkbox"/> 工学部 <input type="checkbox"/> 教育学研究科 <input type="checkbox"/> 社会文化科学研究科 <input type="checkbox"/> 自然科学研究科 <input type="checkbox"/> 法書養成研究科 <input type="checkbox"/> 特別支援教育特別専攻科 <input type="checkbox"/> 養護教諭特別科 <input type="checkbox"/> ハルスパワー科学研究所 <input type="checkbox"/> 大学院先導機構 <input type="checkbox"/> イノベーション推進機構 <input type="checkbox"/> グローバル推進機構 <input type="checkbox"/> 教養教育機構 <input type="checkbox"/> 地域創生推進機構 <input type="checkbox"/> 総合情報統括センター <input type="checkbox"/> グローバル教育カレッジ <input type="checkbox"/> 大学教育機能開発総合研究センター <input type="checkbox"/> 政策創造研究教育センター <input type="checkbox"/> 五高記念館 <input type="checkbox"/> eラーニング推進機構 <input type="checkbox"/> 沿岸域環境科学教育研究センター <input type="checkbox"/> 先進マグネシウム国際研究センター <input type="checkbox"/> 生命資源研究・支援センター <input type="checkbox"/> 環境安全センター <input type="checkbox"/> 埋蔵文化財調査センター <input type="checkbox"/> 附属図書館 <input type="checkbox"/> 保健センター	<input type="checkbox"/> 医学部 <input type="checkbox"/> 医学部附属病院 <input type="checkbox"/> 生命科学研究所 <input type="checkbox"/> 医学教育部 <input type="checkbox"/> 保健学教育部 <input type="checkbox"/> 発生医学研究所 <input type="checkbox"/> 国際先端医学研究機構 <input type="checkbox"/> 生命資源研究・支援センター <input type="checkbox"/> エイズ学研究センター	<input type="checkbox"/> 薬学部 <input type="checkbox"/> 薬学教育部 <input type="checkbox"/> 生命資源研究・支援センター	<input type="checkbox"/> 教育学部附属小学校 <input type="checkbox"/> 教育学部附属中学校	<input type="checkbox"/> 教育学部附属幼稚園

図2-1 主要5キャンパス位置等

(3) 各キャンパスの特徴

黒髪キャンパス

本学の本部があり、文系・理系及び全学部を対象とした教養教育を実施しているメインキャンパスである。県道337号を挟み、北地区(教育学部附属特別支援学校を含む)と南地区で構成される。立田山と白川に挟まれた自然豊かな環境である。

部局として、北地区に文学部、教育学部、法学部等、南地区に理学部、工学部等がある。



黒髪キャンパス (2010年撮影)

本荘キャンパス

医学系のキャンパスであり、北地区、中地区、南地区の3地区で構成される。白川を挟み、熊本市の中心部に隣接している。

北地区は医学部、医学部附属病院があり、患者も含め多くの人が入り出している地区である。中地区に本荘中5(発生医学研究所)や生命科学系の各研究センター、南地区に医学部保健学科の他、福利施設等がある。



本荘キャンパス (2010年撮影)

大江キャンパス

薬学系単独で一つのキャンパスを形成している。薬用植物園は一般開放されており、路面電車等の公共交通の利便性の高い場所にあることから市民の訪問も多い。薬用植物園に加えキャンパス内には多くの樹木があり、周辺市街地に良好な住環境を提供している。



大江キャンパス (2010年撮影)

京町キャンパス

教育学部附属小学校と附属中学校で構成されるキャンパスである。東は熊本城へ至る都市軸(県道熊本・四方寄線/旧豊前街道)に面して附属小学校グラウンドがある。西は京町台の崖地に面して附属中学校グラウンドがあり、同グラウンドからは金峰山をはじめとする西部山系の眺望景観が広がる。



京町キャンパス (2010年撮影)

城東町キャンパス

教育学部附属幼稚園のキャンパスである。敷地前面は道路を隔てて坪井川、その先は熊本城の城域となっており、緑豊かな景観が広がる。他方、敷地の北・東・南側は住宅等の密集した市街地に囲まれている。市役所や熊本市の中心商店街が至近距離にある、利便性の高い場所である。



城東町キャンパス (2006年撮影)

2-1 キャンパスの現状

(4) 歴史的環境

熊本大学は、1756年(宝暦6年)に開かれた、日本最初の官立医療施設である細川藩の再春館や薬用植物園としての蕃滋園(ばんじえん)を源流とする医学部・薬学部、1887年(明治20年)開設の第五高等中学(後の第五高等学校)の流れをくむ文・法・理・工学部、1874年(明治7年)開設の県立仮熊本師範学校に始まる教育学部等で構成される。

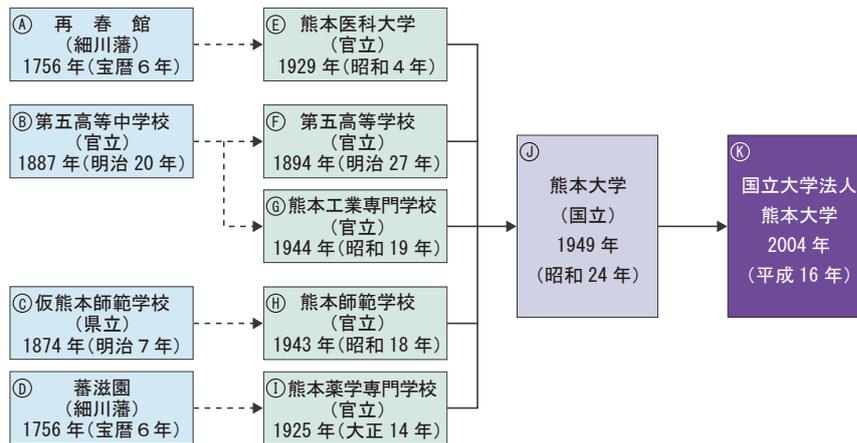


図 2-2 熊本大学の変遷

黒髪キャンパスには、国指定の重要文化財として五高記念館(旧第五高等中学校本校/1889年(明治22年)完成)、化学実験場(旧第五高等中学校化学実験場/1889年(明治22年)完成)、正門[赤門](第五高等中学校正門/1889年(明治22年)完成)、工学部研究資料館(旧熊本高等工業学校機械実験工場/1908年(明治41年)完成)がある。

表 2-3 主な歴史的資源等一覧

	黒髪キャンパス	本荘キャンパス	大江キャンパス	京町キャンパス	城東町キャンパス
国指定重要文化財	五高記念館/北 化学実験場/北 *「化学遺産」認定(日本化学会) 赤門/北 工学部研究資料館/南 *「機械遺産」認定(日本機械学会)				
登録有形文化財	本部/南	山崎記念館/北			
記念館等	工学部百周年記念館/南 黒髪南C7/南	肥後医育記念館/中	薬学部資料館 宮本記念館		
緑	榎、楠、桜並木/北 銀杏並木、楠/南	かいのき/北 楠/北	薬用植物園 楠	楓	楠
記念碑等	中門/北 サインカーブ/北 龍南健児の像/北 ラフカディオハーンの碑レリーフ/北 薬園由来の碑/北 黒本植の碑/北 第五高等学校跡の碑/北 習学寮跡の碑/北 行幸記念碑/北 夏目漱石の碑銅像句碑/北 「武夫原」の歌碑/北 嘉納治五郎の碑/北	解剖慰霊碑/北 谷口長雄先生像/中 実験動物慰霊碑/中	行幸記念碑	行幸記念碑	
					

五高で教鞭をとった夏目漱石の像(写真左)と句碑

(5) 施設・設備の現状

1) 施設の維持管理

本学が保有している施設の総面積は約 44.5 万㎡あり、建築後 25 年以上経過している施設は約 22.2 万㎡である。

これまでに耐震補強などを含む老朽改善を約 14.3 万㎡進めてきたが、残りの約 7.9 万㎡について大規模改修に着手できていない状況にある。このまま推移すると 10 年後の 2025 年度(平成 37 年度)には、未改修面積は約 14.2 万㎡にのぼる。

この 2025 年度(平成 37 年度)における未改修面積は、主要キャンパスでは、黒髪 5.6 万㎡、本荘 4.8 万㎡、大江 0.6 万㎡、京町 0.6 万㎡となり、城東町はすでに改修済みである。

施設の改修及び修繕については、施設の耐用年数に基づいて適切に行う計画としている。また、現状把握のため、施設劣化度調査を実施し、修繕計画に反映させている。



耐震改修建物

2) 施設の有効活用

施設の有効活用に向けた現状把握として、全室使用実態調査、使用室の引継ぎ状況調査、講義室稼働率調査を実施している。これらの調査から改善が必要なスペースについて措置を求め、既存施設の効果的な運用・適正化を図るという P D C A サイクルによる取組みを実施している。

全室使用実態調査では、附属学校や附属病院等を除く施設の全室を対象に、使用・未使用、利用者数、利用時間等の記述調査後、現地調査を行い、未使用室や利用時間の短い室などの課題のある室を抽出し、改善指導を行っている。

使用室の引継ぎ状況調査では、退職や異動に伴い、不用品・不用機器等の処分等のルールを定め、各部局事務と退職者等とが行う引渡し状況について明文化するものとした。

講義室については、使用状況を確認の上、稼働率が低い場合は共用化を図る等の検討を行う必要がある。



リニューアルされた
学生ラウンジ

3) 設備の有効活用への取組

教育用・研究用の設備は、利用者にとって自らが求める性能を有する専用機が至近に設置され、いつでも自由に利用できる環境が望ましいが、限られた財源やスペースを効率的にそして効果的に活用すると共に、新たな教育・研究の展開を期待し、「共同利用」を推進することを「熊本大学における設備整備に係る基本方針(設備マスタープラン/2012年(平成24年)9月)」に定めた。

設備マスタープランでは、共同利用・再利用の推進、省エネ対応、設備の類型に応じた設備整備の審査・検討を踏まえることを柱としている。

2-1 キャンパスの現状

4) 環境安全衛生に関わる取組

教育・研究活動において生じる廃棄物、排水、化学物質等について、関係法令等を遵守し、以下の管理を行い、安全衛生に係る教育・研究環境を整えることとしている。

- ・廃棄物の分別回収の徹底と定期的な状況確認による減量化。
- ・年10回の廃液の一括収集と水質測定による排水管理。
- ・全実験室の作業環境測定実施と熊本大学薬品管理システム(YAKUMO)への化学物質使用登録の義務づけによる危険物等の数量把握。
- ・放射線物質の適正管理と、原子力規制委員会への定期的届け出。
- ・高濃度PCB廃棄物の適切な保管。
- ・高圧ガスボンベの定期的な取扱い説明会の実施と、全学一括管理へ向けた取組。



分別回収保管庫

5) エネルギー使用

本学のエネルギー構成比率は、平均して電気77%、都市ガス9%、A重油14%(主に附属病院の冷暖房に使用)となっている。エネルギー使用量は、2009年度(平成21年度)を基準年度とし、年平均1%の削減を目標に挙げ、全学を挙げてその合理化を推進している。

CO₂排出量は、エネルギー構成比率と同様に電気に起因するものが78%である。全国的に実施されている電力需給対策(節電対策)の実施により、排出量の削減に努めている。



太陽光発電パネル

6) グローバル化に向けたキャンパス整備

本学は、留学生500人計画を掲げ大学のグローバル化に向けて国際交流を強化しているなかで、外国人留学生470名(47ヶ国)(2015年(平成27年)5月現在)が在学、外国人研究者368名(2014年度(平成26年度)現在)を受け入れている。本学が保有する宿泊施設5棟200室には232名が居住しているが、留学生・外国人研究者の入居割合は約30%に留まっており、宿泊施設が十分確保されている状況ではない。

また、留学生や外国人研究者のほか、学会・シンポジウム等への海外からの来訪者の受け入れ体制を強化するため、2013年(平成25年)3月に「屋外サイン整備ガイドライン」を策定し、順次外国語表記のある屋外サインの整備を実施している。



多言語施設サイン

7) 情報通信設備

中期目標・中期計画に基づき「高度情報化キャンパス環境の高度化」及び「情報セキュリティの強化」を目指し、総合情報環境構想では、利用者、サービス、データベース、組織的・人的サポート、インフラ基盤について効果的かつ効率的な整備を推進している。

近年の高度情報通信社会の急速な発展に伴う重要事項に対し、積極的かつ戦略的に取り組むためにICT*戦略会議を設置するとともに、全学的なICT戦略の実施組織として、総合情報基盤センターを改組し総合情報統括センターを新設した。

(*ICT: Information and Communication Technology 情報通信技術)

2-1 キャンパスの現状

各キャンパスの現状として、近隣の環境や周辺との関係、現在の地区の構成と変遷の経緯、及び建物の状況を整理する。

2-1-1 黒髪キャンパスの現状

(1) 近隣の環境

黒髪キャンパスは、熊本市中心部から2 kmの位置にあり、北に立田山、南に白川と自然環境に恵まれた環境にある。また、文教地区である周囲には学校も多く、閑静な住宅街にある。

(2) キャンパス周辺との関係

北地区と南地区の間を通る県道337号は片側1車線で交通量は多く歩道は狭い。また、キャンパス周辺は、車の離合が困難な狭い道路に囲まれており、南地区の南側隣地は河川と隣接している。

(3) 地区の構成

北地区は、教育学部、文学部、法学部のいわゆる文系学部を中心に、黒髪北E1（全学教育棟）、図書館、運動施設、五高記念館、学生会館、センター等がある。また、道路を挟み東側に教育学部附属特別支援学校がある。

南地区は、工学部、理学部のいわゆる理系学部を中心に、本部、各機構、各センター、駐車場等がある。

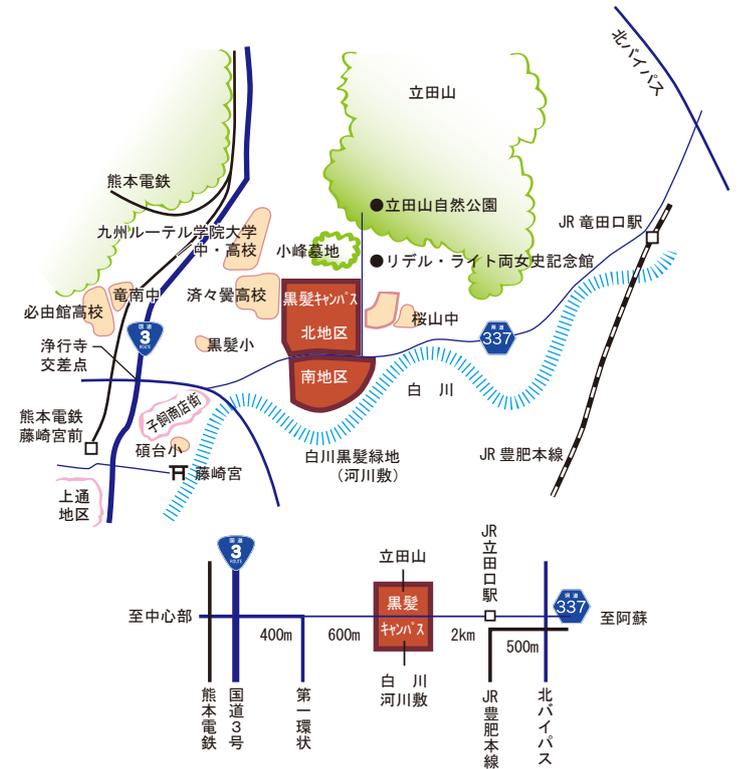
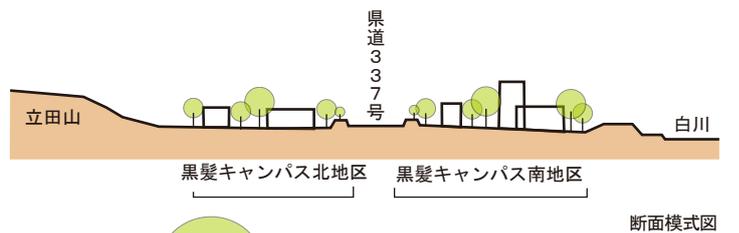
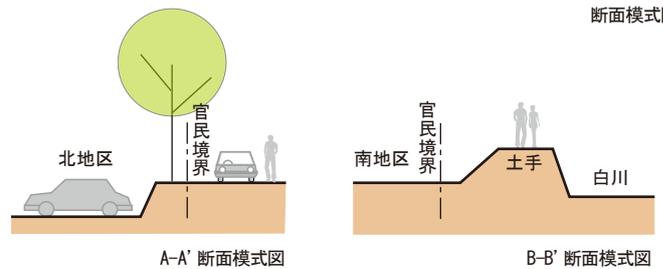


図 2-3 近隣の環境



断面模式図



A-A' 断面模式図

B-B' 断面模式図

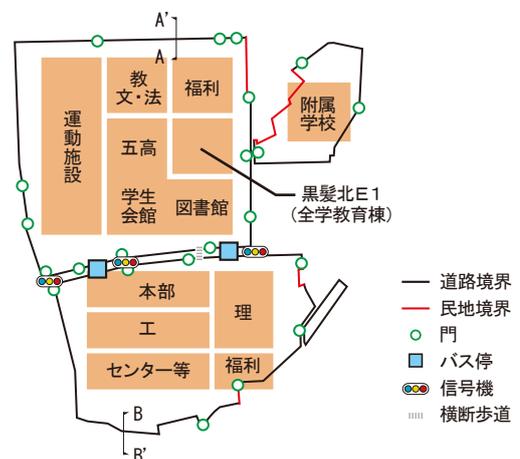


図 2-4 キャンパス周辺と地区の構成

2-1 キャンパスの現状

(4) キャンパスの変遷

黒髪キャンパスは、1887年（明治20年）に現在の北地区で第五高等中学が新設されたことに始まる。1909年（明治42年）には、第五高等学校工学部から改称していた熊本高等工業学校が現在の南地区に移転した。1965年（昭和40年）には、教育学部附属養護学校（現、教育学部特別支援学校）が開校し、東側にキャンパスが拡大した。

(5) 建物の状況

1965年（昭和40年）～1984年（昭和59年）に整備した築30～50年の建物が半分以上を占める。次に1995年（平成7年）～2004年（平成16年）に整備した、築10～20年の建物が25%を占める。

改修歴	建築年	経過年 (2014年)	延床面積 ㎡
なし	あり		
■	□	89年以上	5,909(3%)
■	□	50年以上	11,197(7%)
■	□	40年以上	74,071(43%)
■	□	30年以上	17,877(10%)
■	□	20年以上	13,031(8%)
■	□	10年以上	42,887(25%)
■	□	10年未満	6,674(4%)

*「改修歴あり」は、外部、内部、耐震のいずれかの大規模改修を実施した建物

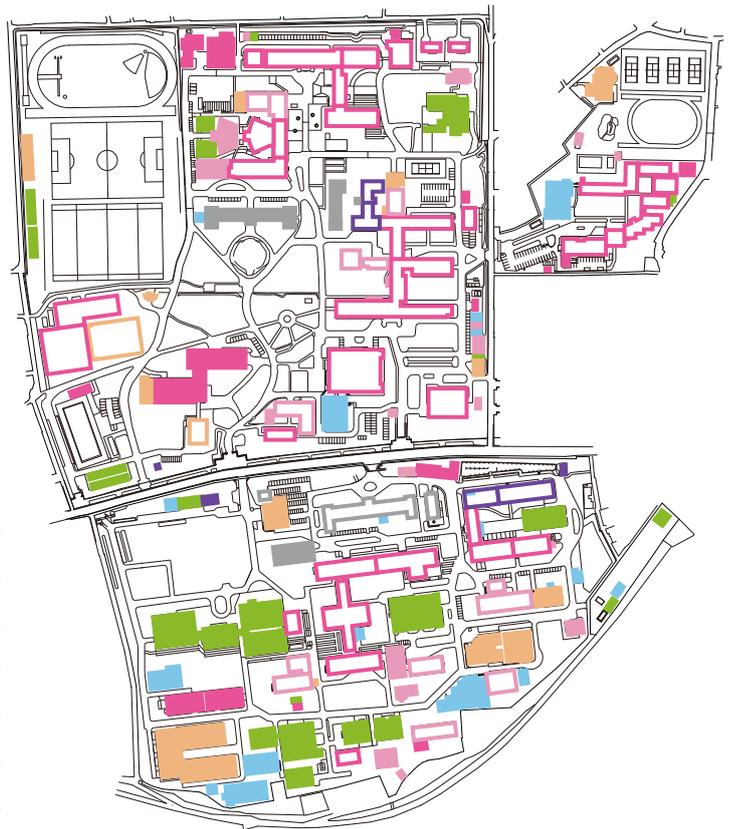
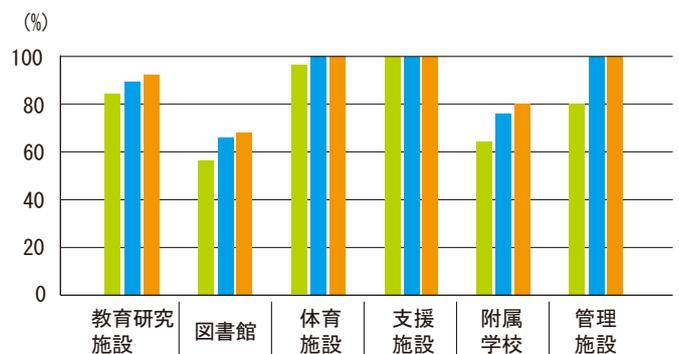


図2-5 建物の建築年と改修歴

黒髪キャンパスの用途別整備率は、支援施設は100%の整備率で充足しているが、図書館は56%と低い状況である。

黒髪キャンパスが、熊本大学や全国の国立大学と比較して相対的に低いのは管理施設である。



*必要面積に占める保有面積の割合（平成27年度）

■ 黒髪キャンパス ■ 熊本大学 ■ 全国の国立大学

図2-6 整備率

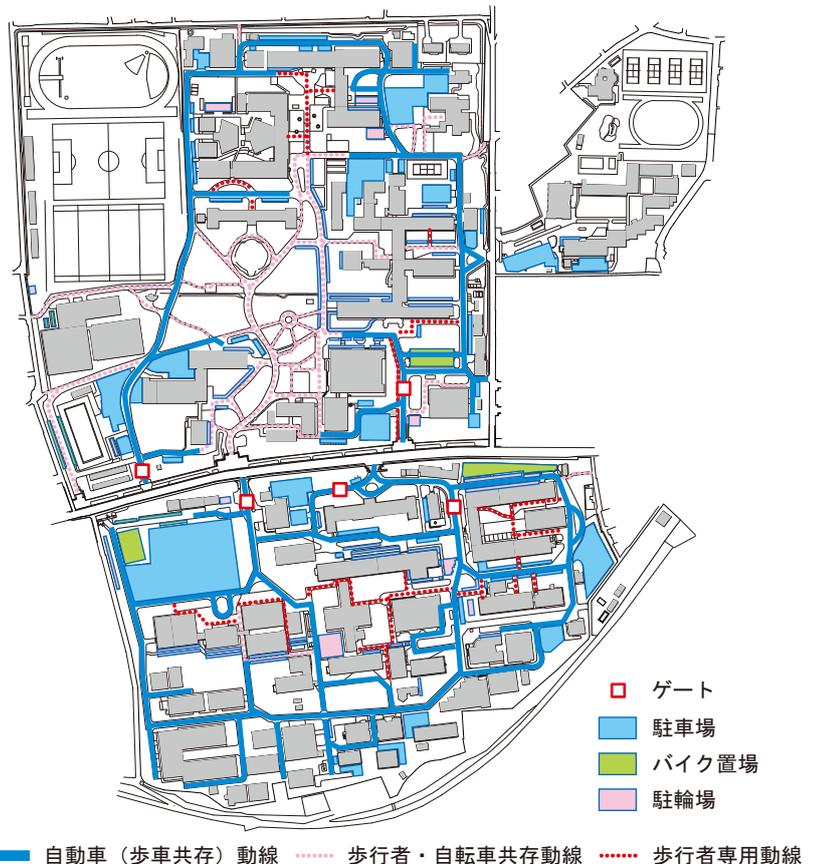
2-1 キャンパスの現状

(6) 交通の現状

現状の駐車台数は、北地区406台、南地区564台である。2012年度(平成24年度)調査では、北地区の平均駐車台数312台、ピーク時502台、南地区の平均駐車台数は432台、ピーク時584台である。指定の駐車場以外への駐車も見られ、駐車場は不足傾向にある。

駐輪場の整備に関しては、各部局毎に対応しているところではあるが、無秩序な駐輪が多いのが現状である。

自動車及び自転車と歩行者の動線が重複する箇所や、交錯する箇所も見受けられる。



現状の図は平成26年度末時点
以下、図2-14まで同じ

図2-7 交通の現状

(7) 緑地・広場の現状

緑比率が高く、北の立田山から連続的な緑地を形成している。

キャンパス内は、高木と低木もしくは芝で構成されていることが多い。北地区の外周部は、法面と高木という構成になっている。

樹種としては、クスノキ、イチョウ、ヒマラヤシダ、カシ類があり、北地区には、エノキ、ムクノキ、センダン、ナンキンハゼも見られる。

大木群や並木が景観を形成している一方で、鬱蒼とした雰囲気になってしまう箇所や時期もある。

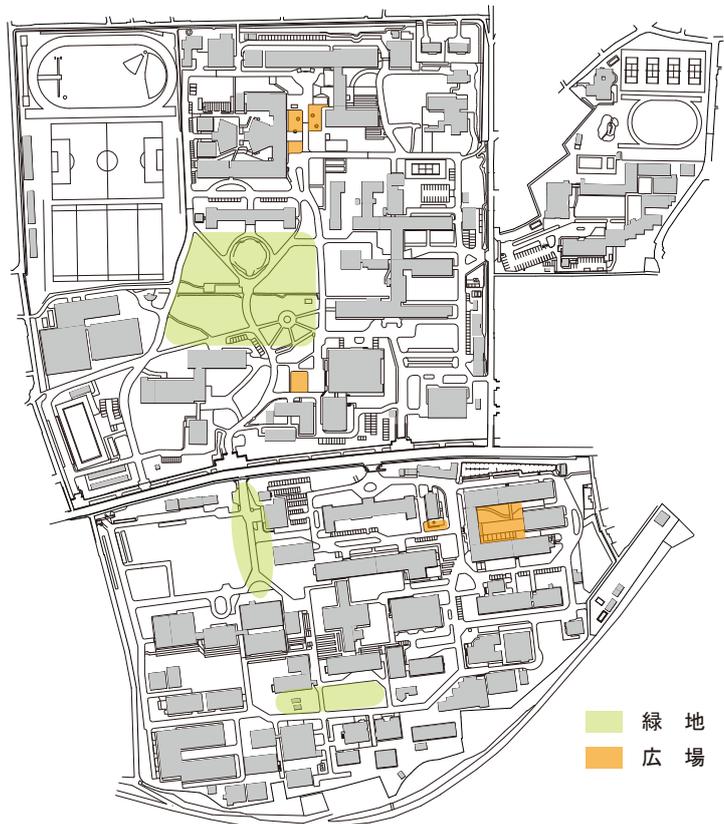


図2-8 緑地・広場の現状

2-1 キャンパスの現状

(8) インフラストラクチャーの現状

1) 電力設備

耐用年数を超過した受変電設備及び高圧ケーブル等については、電力の安定供給のために計画的な更新が必要である。また、非常時の対策として黒髪南C3（工学部研究棟I）他2箇所合計440kVAの自家発電設備、省エネルギー対策として黒髪南S9（研究実験棟）他17箇所合計280kWの太陽光発電設備を設置している。

- 太陽光発電設備
- 経年20年以上の受変電設備
- 経年20年未満の受変電設備
- 経年20年以上のケーブル
- 経年20年未満のケーブル

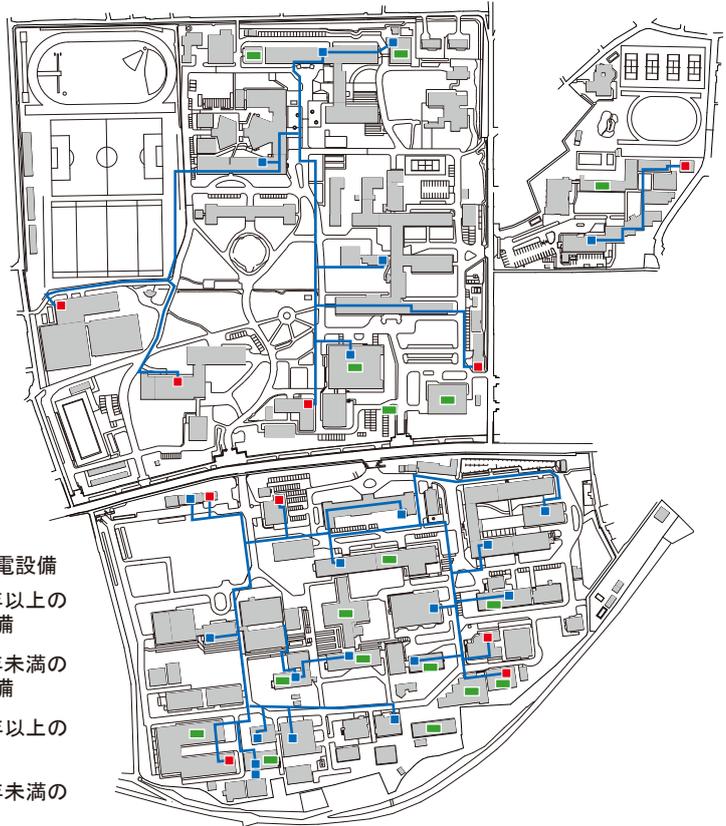


図 2-9 電力設備の現状

2) 電話・情報通信設備

電話交換機は2014年度（平成26年度）に更新を行っており、通信ケーブル・端子盤等についても改修整備に合わせて順次更新を行っているが、老朽化した設備については計画的な更新が必要である。

- 経年20年以上の端子盤
- 経年20年未満の端子盤
- 経年20年以上のケーブル
- 経年20年未満のケーブル

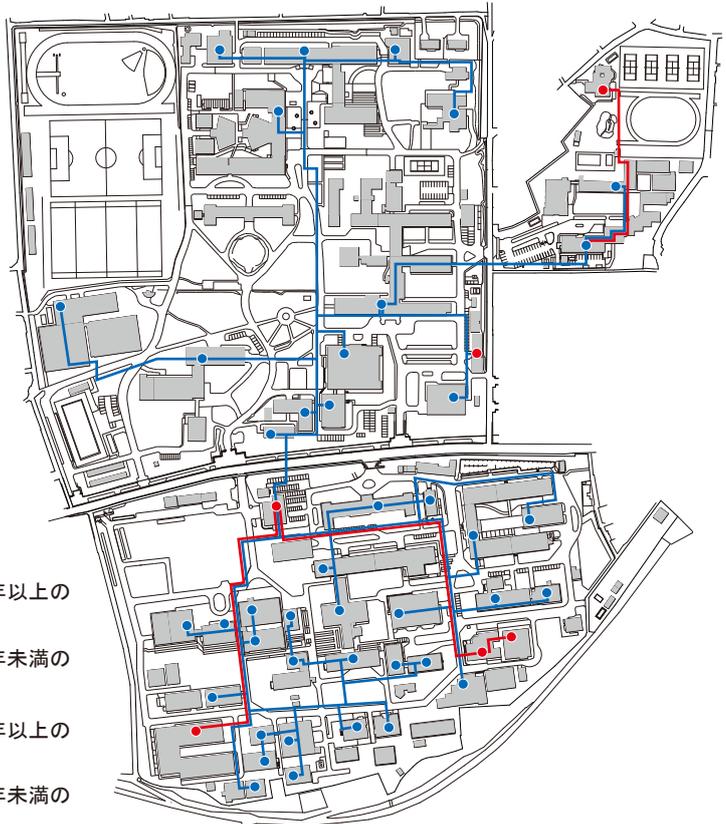


図 2-10 情報通信設備の現状

2-1 キャンパスの現状

3) 給水設備

北地区で埋設配管について、経年劣化による漏水の発生や铸铁管、鋼管内の発錆が赤水の発生原因となっている。

南地区および特別支援学校については、ポリエチレン管へ更新が完了している。

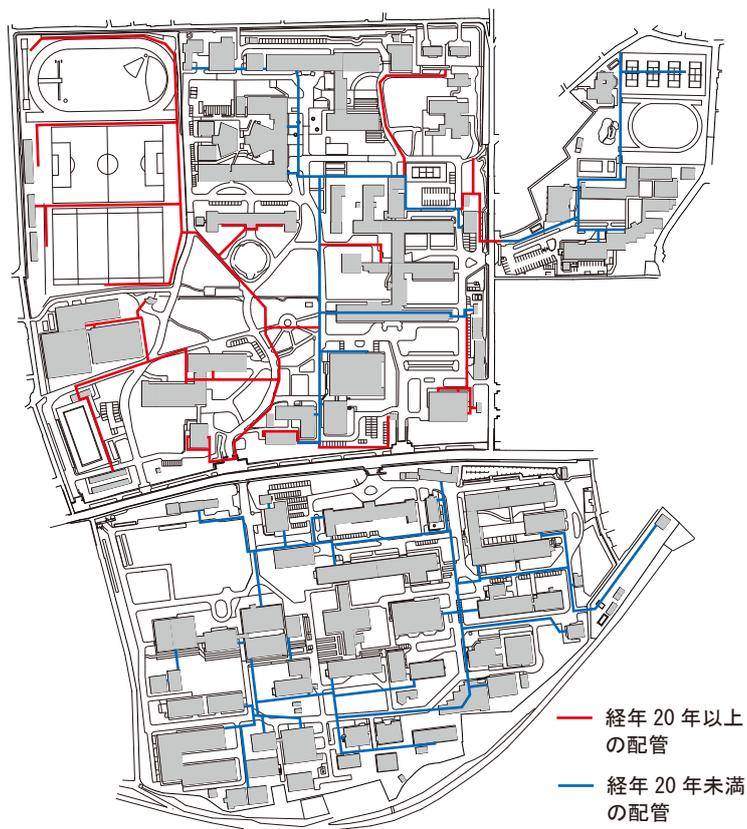


図 2-11 給水設備の現状

4) 排水設備

北地区について、一部の建物廻りは雨水排水が分流化されているが、全般的には分流化されておらず、集中豪雨発生時に、雨水排水の処理が出来ないため汚水・雑排水の処理に影響が出ている。

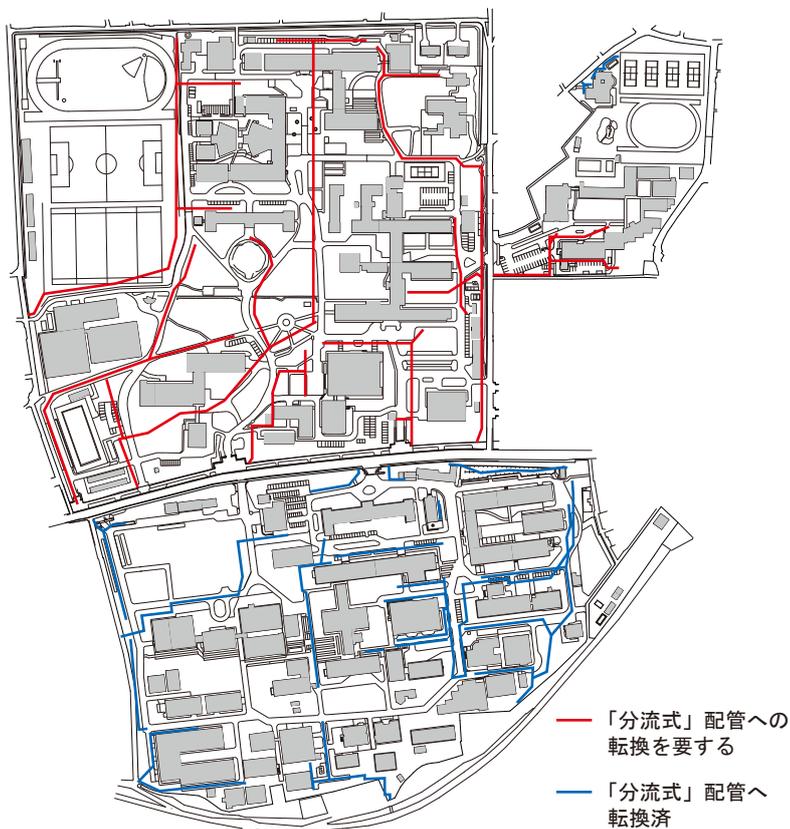


図 2-12 排水設備の現状

2-1 キャンパスの現状

5) 都市ガス設備

北地区の埋設配管について、経年劣化や鋳鉄管、鋼管の腐食によるガス漏れが度々発生している。

南地区および特別支援学校については、ポリエチレン管へ更新が完了している。

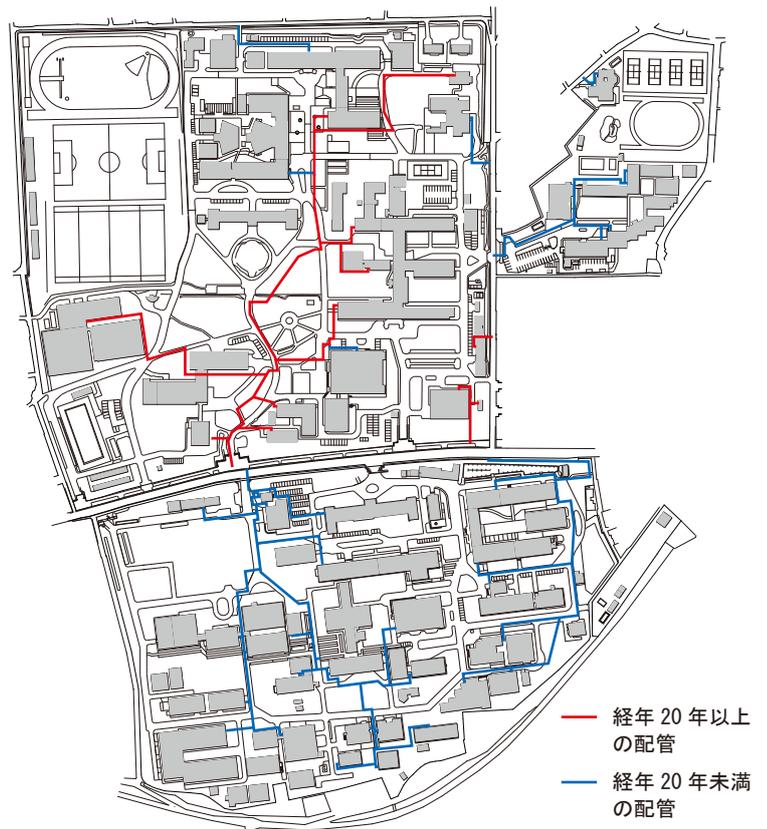


図 2-13 都市ガス設備の現状

6) エレベーター設備

経年 20 年以上の機種が北地区で 1 基、南地区で 3 基設置されている。

また、附属図書館、黒髪北 N11 (教育学部東棟)、特別支援学校、本部、黒髪南 S12 (国際先端科学技術研究拠点施設) 以外については耐震対策が行われていない。

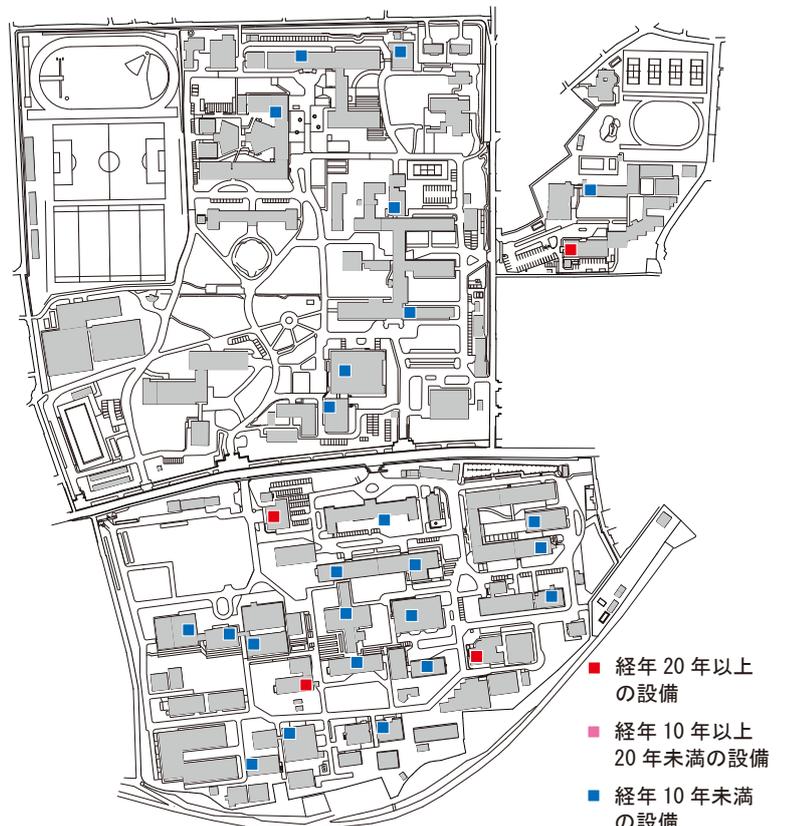


図 2-14 エレベーター設備の現状

2-1-2 本荘キャンパスの現状

(1) 近隣の環境

本荘キャンパスは、熊本市中心部から700mの位置にあり、白川を挟んで熊本市中心部と隣接している。

中心部にあるバスターミナルからは近距離にあり、西側のJR熊本駅からも路線バスによるアクセス性がよい。

(2) キャンパス周辺との関係

北地区と中地区の間に産業道路が走っている。

北地区の北側には1級河川の白川が流れており、河川改修に伴い護岸の環境整備が実施されている。また、三の井手が北地区を東西に流れ、中地区東側・南地区西側には水路がある。

周辺は、マンション、団地、民家等の住宅地が広がる。

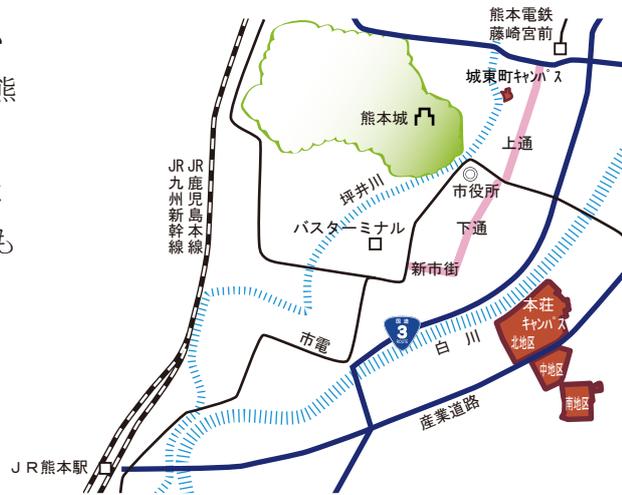
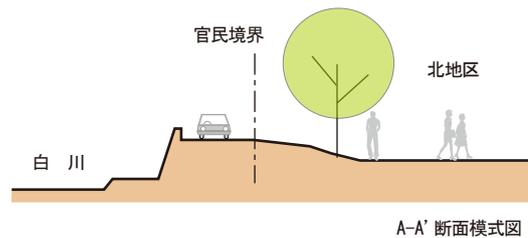


図 2-15 近隣の環境



A-A' 断面模式図

(3) 地区の構成

北地区は、附属病院、本荘北1（医学部臨床研究棟）、本荘北2（医学教育図書棟）、本荘北3（医学総合研究棟）、本荘北4（基礎医学研究棟）、本荘北5（臨床医学教育研究センター）、山崎記念館、設備管理棟、看護師宿舎、特別高圧受電棟等がある。

中地区は、本荘中1（生命資源研究・支援センター、動物資源開発研究施設本館）、本荘中2（エイズ学研究センター、生命資源研究・支援センター、動物資源開発研究施設新館）、本荘中3（国際先端医学研究拠点施設（IRCMS））、本荘中5（発生医学研究所）、本荘中6（生命資源研究・支援センター、R I 総合施設、遺伝子実験施設）、肥後医育記念館等がある。

南地区は、保健学科、楷樹会館、本荘体育館、保育施設等がある。

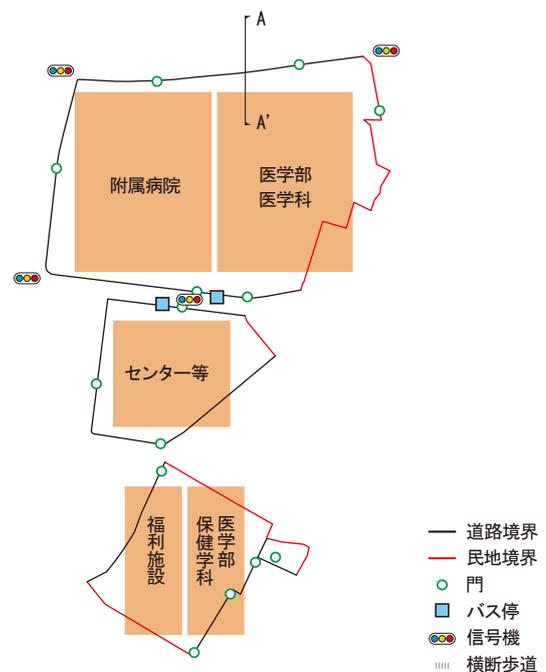
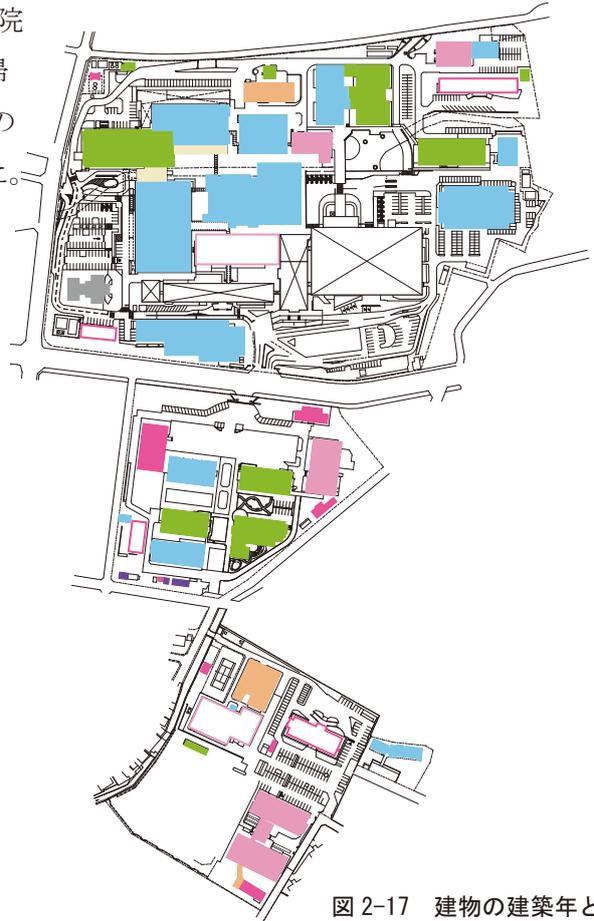


図 2-16 キャンパス周辺と地区の構成

2-1 キャンパスの現状

(4) キャンパスの変遷

熊本における医学教育の源流は、1756年(宝暦6年)創設の医学寮再春館まで遡り、近代においても1871年(明治4年)熊本医学校の設立以降、医学に関する高等教育機関は場所や呼称を変えながら絶えることなく続いてきた。現在の本荘キャンパスは、1906年(明治34年)私立熊本医学校の附属病院が当地に移転立地したことに始まる。その後呼称は私立熊本医学専門学校、県立熊本医科大学、官立熊本医科大学と変わり1945年(昭和20年)に戦災で二の丸に移転し1964年(昭和39年)の附属病院中央診療棟を皮切りに随時本荘地区へ移転帰還した。1949年(昭和24年)の国立大学への移行に伴い熊本大学医学部として包括された。



(5) 建物の状況

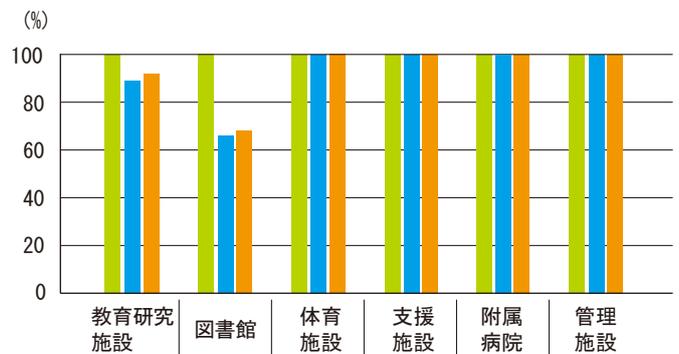
再開発が進み、築20年未満の建物が73%を占める。築30年以上で改修歴のない建物が存在する。

改修歴	建築年	経過年 (2015年)	延床面積 ㎡
なし	あり		
■	□	~1925年(T14年)	89年以上 6,827(3%)
■	□	1957年(S32年)~	50年以上 7,754(4%)
■	□	1965年(S40年)~	40年以上 10,042(5%)
■	□	1975年(S50年)~	30年以上 25,469(12%)
■	□	1985年(S60年)~	20年以上 3,854(2%)
■	□	1995年(H7年)~	10年以上 62,479(30%)
■	□	2005年(H17年)~	10年未満 89,250(43%)

*「改修歴あり」は、外部、内部、耐震のいずれかの大規模改修を実施した建物

図2-17 建物の建築年と改修歴

本荘キャンパスの用途別整備率は、100%と充足している。



*必要面積に占める保有面積の割合(平成27年度)

■ 本荘キャンパス ■ 熊本大学 ■ 全国の国立大学

図2-18 整備率

2-1 キャンパスの現状

(6) 交通の現状

北地区の立体駐車場2箇所の整備で渋滞等の一部は改善がみられるが、慢性的な駐車場不足の抜本的な改善には至っていないため、引き続き北・中・南地区全体を視野に入れたキャンパス全体の駐車場整備計画が必要な状況である(北地区947台、うち患者用811台、中地区240台、南地区489台)

中地区の正面、南地区のグラウンドにおける暫定的な駐車場利用については早急な対応が望まれる。

[出入口について]

1) 産業道路から北地区および南地区への出入口では歩行者と自動車の交通が混雑している。北地区西側(新世継橋方面)の出入口との適切な分担を図るとともに北地区における駐車場整備と合せた出入口の改善が望まれる。歩行者については、北地区および中地区の主要動線が産業道路で分断されているため、キャンパスの一体性を阻害している。

2) 中地区・南地区間の出入口は、現状では水路によって分断され本荘キャンパスの一体感を阻害している。水路を活かした出入口の個性化を図り中地区・南地区間の連続化を図ることが望まれる。

3) 本荘キャンパスには都市公園や水路が隣接している一方で、その近くにある出入口が脆弱である。公園や水路を活用したアプローチ道路の整備と出入口の強化を図りキャンパスと周辺市街地とを円滑に往来できることが望まれる。

(7) 緑地・広場の現状

北地区は再開発の最終段階に入っており、広場の一部について供用開始している。今後は歩行者専用の南北軸沿道に広場を整備する予定である。

同じく、中地区においても歩行者南北軸を中心に広場を配置する予定である。

南地区は、駐車場比率が高く、広場の余地がないのが現状である。

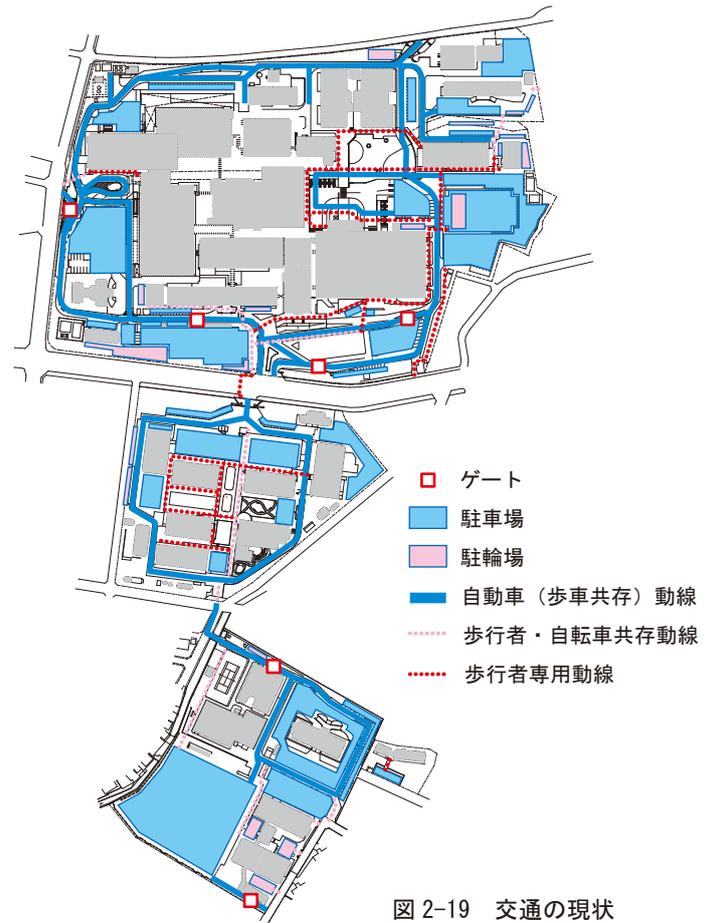


図 2-19 交通の現状

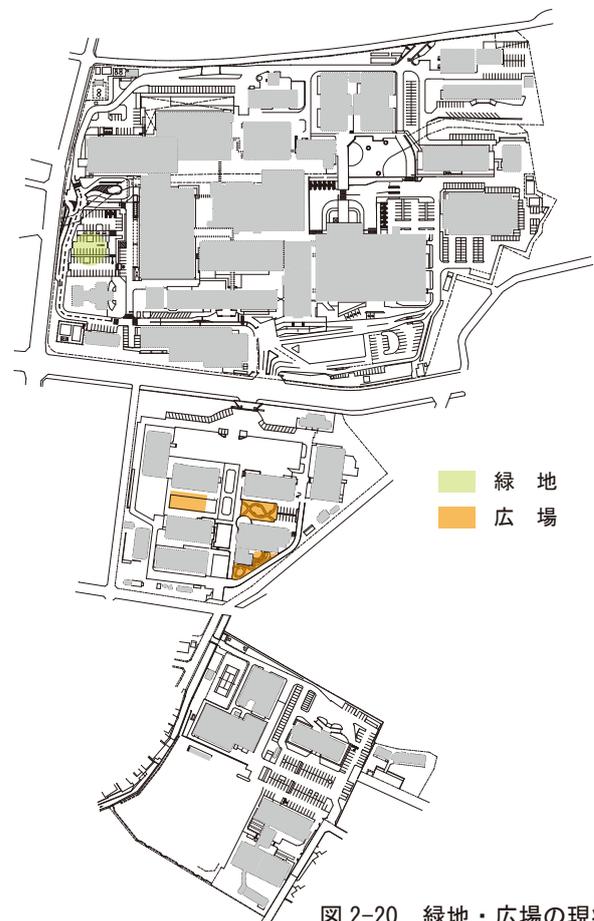


図 2-20 緑地・広場の現状

2-1 キャンパスの現状

(8) インフラストラクチャーの現状

1) 電力設備

耐用年数を超過した受変電設備及び高圧ケーブル等については、電力の安定供給のために計画的な更新が必要である。また、非常時の対策として特別高圧受電棟他 10 箇所合計 5,774kVA の自家発電設備、省エネルギー対策として本荘中 3 (国際先端医学研究拠点施設 (IRCMS)) に 3 kW の太陽光発電設備を設置している。

- 太陽光発電設備
- 経年 20 年以上の受変電設備
- 経年 20 年未満の受変電設備
- 経年 20 年以上のケーブル
- 経年 20 年未満のケーブル

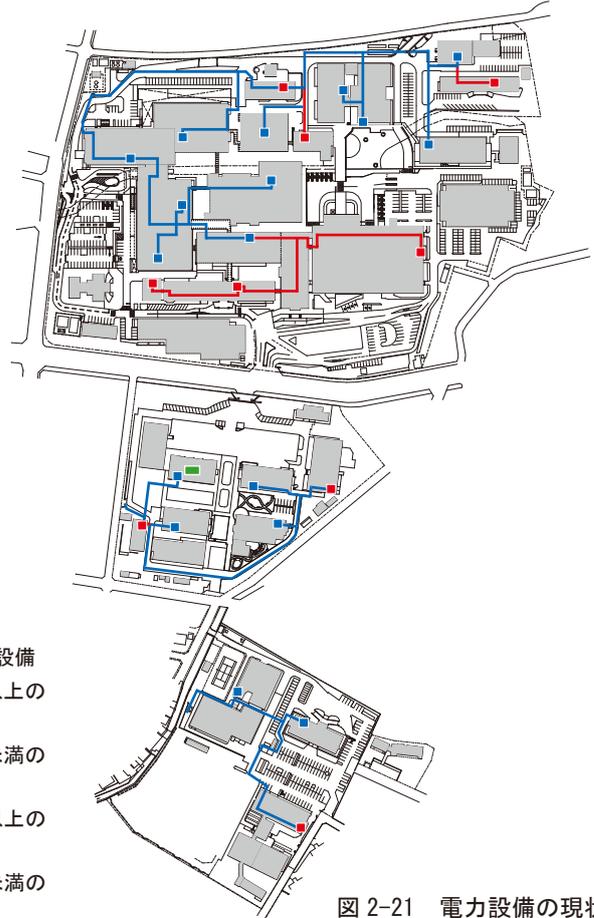


図 2-21 電力設備の現状

2) 電話・情報通信設備

電話交換機は 2009 年度 (平成 21 年度) に更新を行っており、通信ケーブル・端子盤等についても改修整備に合わせて順次更新を行っているが、老朽化した設備については計画的な更新が必要である。

- 経年 20 年以上の端子盤
- 経年 20 年未満の端子盤
- 経年 20 年以上のケーブル
- 経年 20 年未満のケーブル

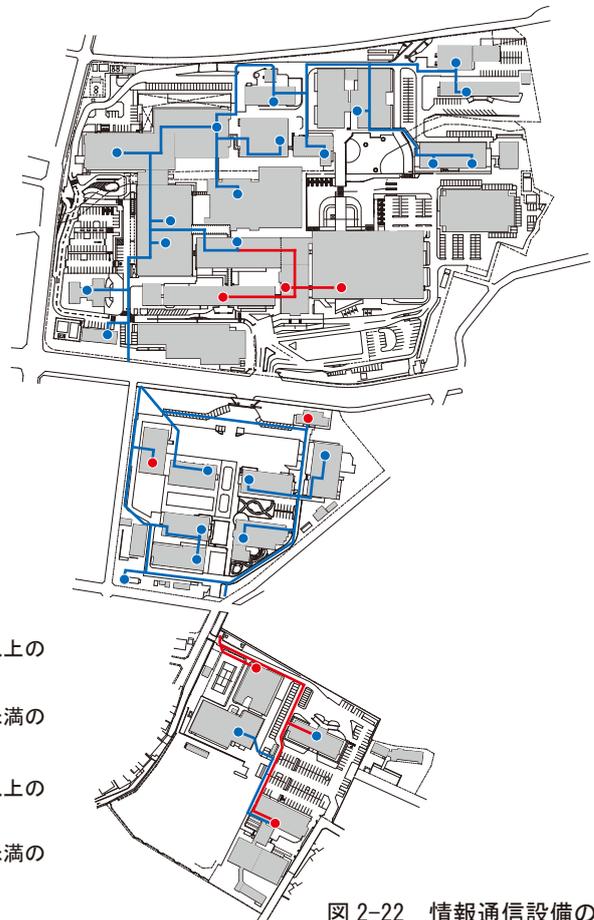


図 2-22 情報通信設備の現状

2-1 キャンパスの現状

3) 給水設備

北地区で、埋設配管については、再開発整備に伴いダクタイル鋳鉄管またはポリエチレン管へ順次更新している。

中地区および南地区については、ポリエチレン管へ更新が完了している。

- 経年 20 年以上の配管
- 経年 20 年未満の配管

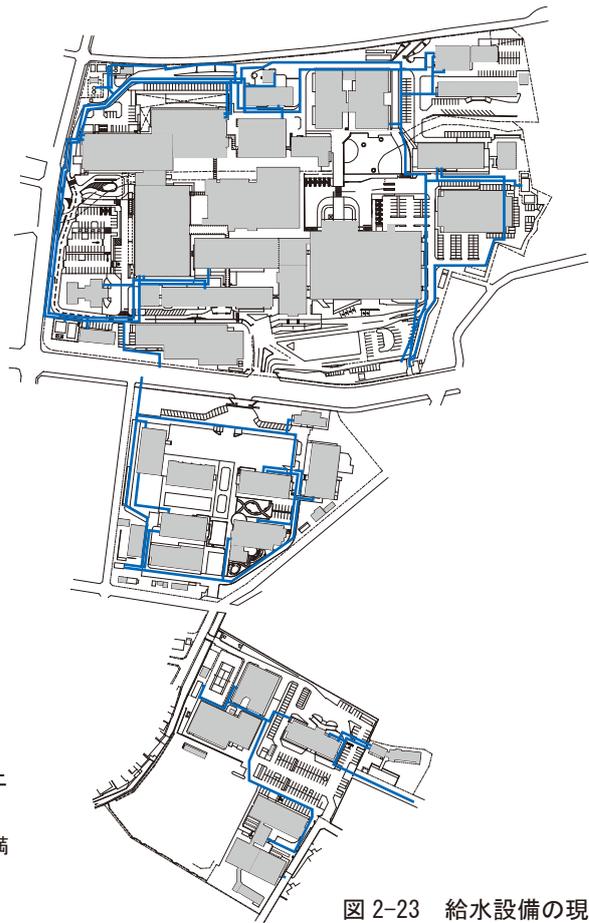


図 2-23 給水設備の現状

4) 排水設備

北地区について、全般的に建物廻りは雨水排水が分流化されている。

中地区・南地区については、全般的に建物廻りは雨水排水が分流化されているが、幹線が分流化されておらず、集中豪雨発生時に、雨水排水の処理ができないため汚水・雑排水の処理に影響が出ている。

- 「分流式」配管への転換を要する
- 「分流式」配管へ転換済

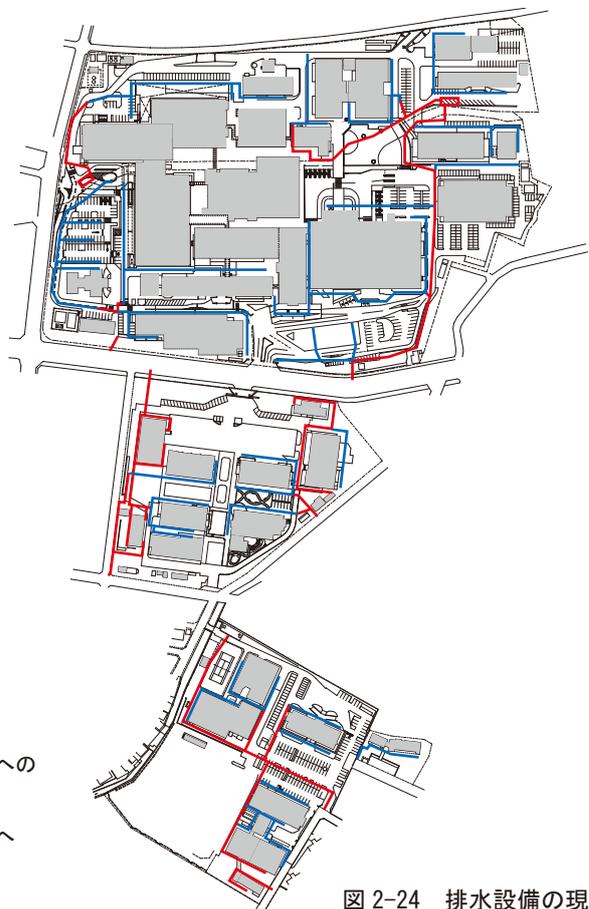


図 2-24 排水設備の現状

2-1 キャンパスの現状

5) 都市ガス設備

中地区および南地区については、ポリエチレン管へ更新が完了している。

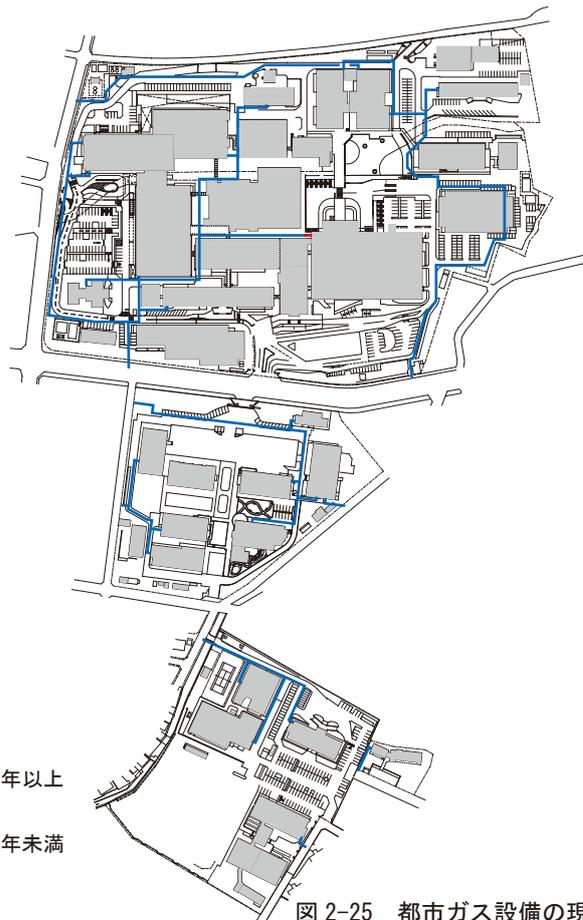


図 2-25 都市ガス設備の現状

6) エレベーター設備

経年 20 年以上の機種が中地区に 2 基設置されている。

また、外来診療棟、管理棟、本荘中 3（国際先端医学研究拠点施設（IRCMS））、本荘南 1（医学部保健学科 A・B・C 棟）以外については、耐震対策が施されていない。

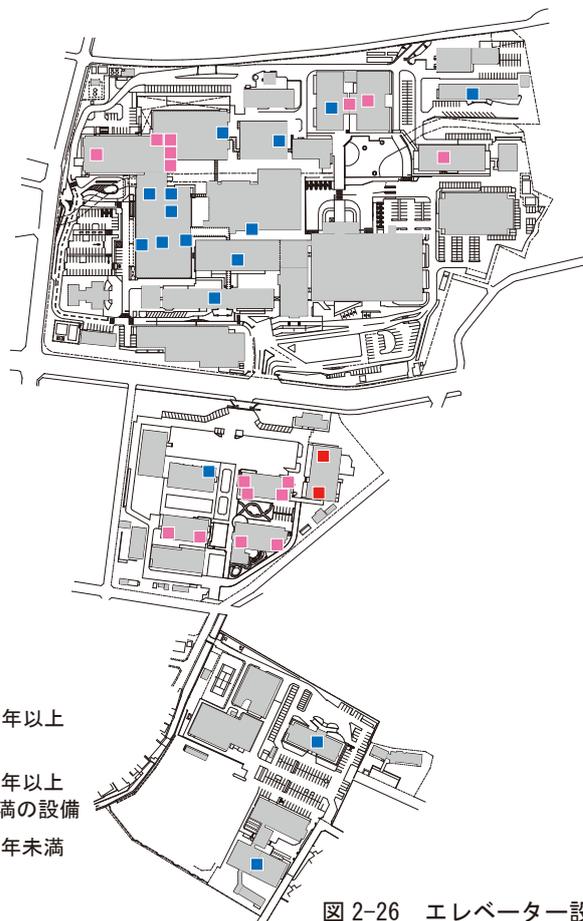


図 2-26 エレベーター設備の現状

2-1-3 大江キャンパスの現状

(1) 近隣の環境

大江キャンパスは、熊本市中心部から1.5kmの位置にあり、本荘キャンパスに近接している。北側のアプローチ道は電車通りに向いており、中心部やJR新水前寺駅からのアクセスもよい。

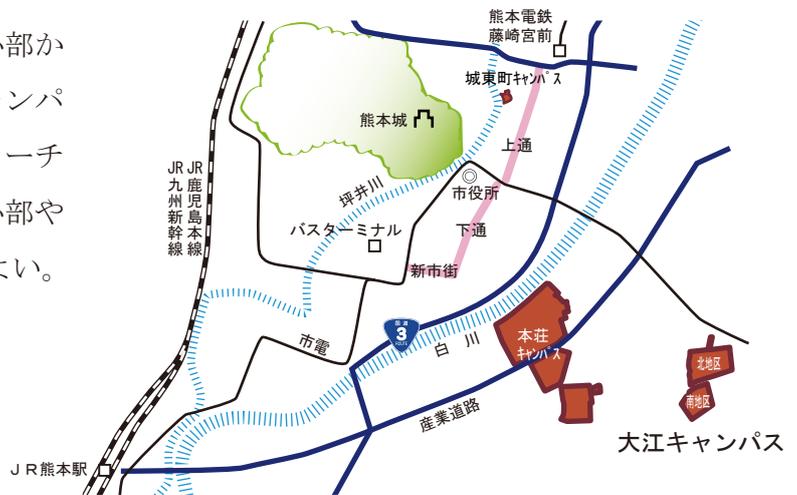
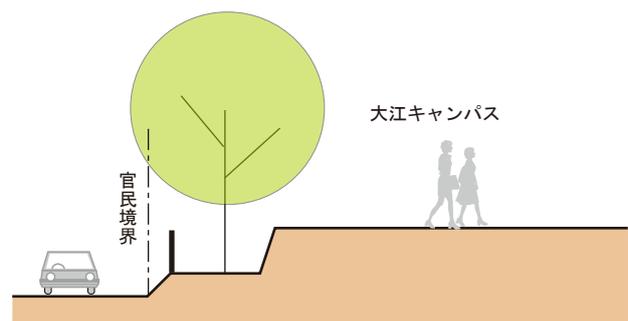


図 2-27 近隣の環境

(2) キャンパス周辺との関係

大通りから街区の内側に入っているため、周辺は住宅地となっており民家やマンションが立地している。

西側は真和中・高校、鎮西中・高校が隣接し、南地区の南側は白山通りに近接している。



A-A' 断面模式図

(3) 地区の構成

北地区には、大江C3 (大学院実験研究棟)、大江C4 (薬学部講義棟)、大江E2 (機器分析施設)、大江W3 (大江地区R1施設)、大江体育館、薬用植物園、宮本記念館及び蕃滋館 (福利施設) 等がある。南地区には、グラウンド、白山町宿舍及び薬用植物園が立地している。

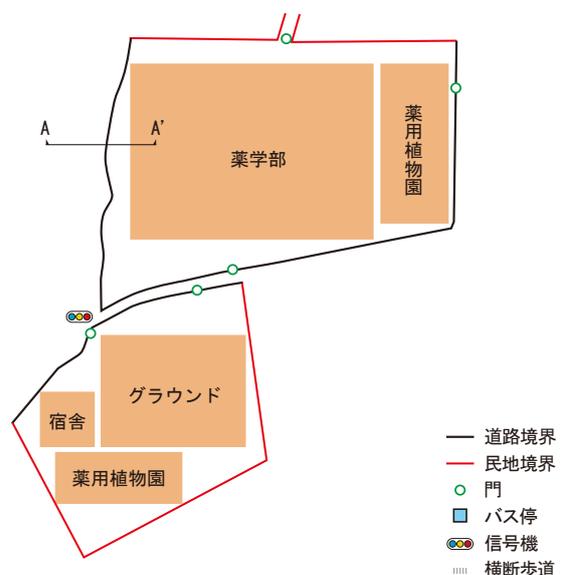


図 2-28 キャンパス周辺と地区の構成

2-1 キャンパスの現状

(4) キャンパスの変遷

熊本における薬学教育の源流は、1756年(宝暦6年)創設の熊本藩御薬園「蕃滋園」にまで遡り、近代において1885年(明治18年)市立熊本薬学校が設立された。その後私立九州薬学専門学校、官立熊本薬学専門学校と呼称は変わり、新制熊本大学薬学部の母体となった。現在の大江キャンパスは私立九州薬学校が山崎町から現在の大江地区に移転したことに始まり、1949年(昭和24年)の国立大学への移行に伴い熊本大学薬学部として包括された。

(5) 建物の状況

築50年以上は南地区の宿舎である。

築40年以上は全体の46%を占め、未改修の建物が一部残る。

改修歴		建築年	経過年 (2015年)	延床面積 ㎡
なし	あり			
■	□	~1925年(T14年)	89年以上	0(0%)
■	□	1957年(S32年)~	50年以上	3,272(18%)
■	□	1965年(S40年)~	40年以上	5,211(28%)
■	□	1975年(S50年)~	30年以上	2,491(14%)
■	□	1985年(S60年)~	20年以上	3,542(19%)
■	□	1995年(H7年)~	10年以上	3,691(20%)
■	□	2005年(H17年)~	10年未満	210(1%)

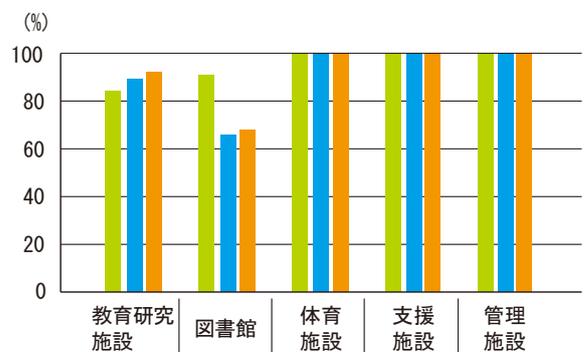
*「改修歴あり」は、外部、内部、耐震のいずれかの大規模改修を実施した建物



図 2-29 建物の建築年と改修歴

大江キャンパスの用途別整備率は、教育研究施設と図書館が100%に達していない。

但し、図書館は、熊本大学や全国の国立大学と比較して相対的に充実している。



*必要面積に占める保有面積の割合(平成27年度)

■ 大江キャンパス ■ 熊本大学 ■ 全国の国立大学

図 2-30 整備率

2-1 キャンパスの現状

(6) 交通の現状

駐車場は、ゲート周辺に集積させている（駐車台数 92 台／薬用植物園への来訪者用はゲート外に設置）。キャンパス北側への指定外への駐車が見られる。

駐輪場は大江体育館前に最も大きなスペースを確保しているが、一部指定外駐輪が見られる。

〔出入口について〕

1) 北門は、自動車の出入りは行われていないが、熊本の都市軸である電車通り方面へのアプローチ道路が続き、キャンパスの歴史をとどめる門でもある。

2) 正門は、自動車、歩行者の主要な出入口となっている。南地区の野球場・運動場の出入口は管理上のルールを設ける等して正門との円滑な連絡を図ることが望まれる。

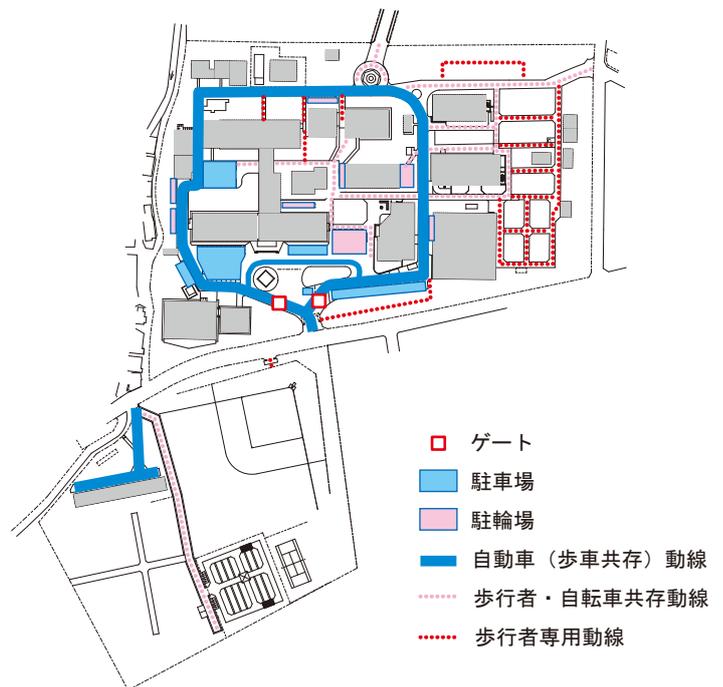


図 2-31 交通の現状

(7) 緑地・広場の現状

大江体育館西側と大江E1（大江）総合研究棟南側にベンチを設置し、ポケットパークを整備している。

薬用植物園と薬用展示室としての散策ルートが緑地を形成している。

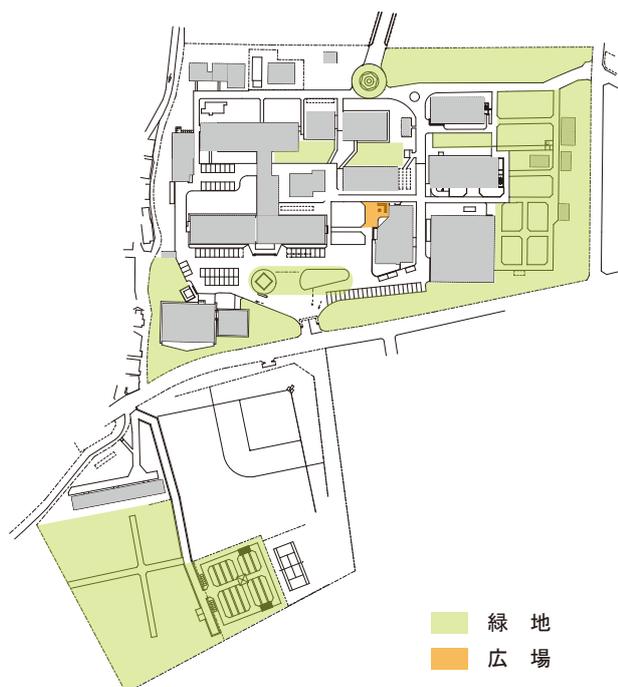


図 2-32 緑地・広場の現状

(8) インフラストラクチャーの現状

1) 電力設備

耐用年数を超過した受変電設備及び高圧ケーブル等については、電力の安定供給のために計画的な更新が必要である。

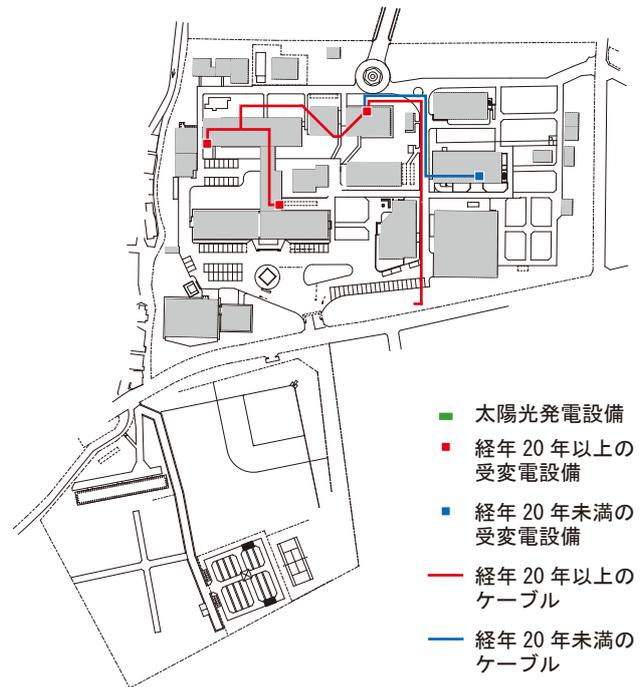


図 2-33 電力設備の現状

2) 電話・情報通信設備

電話交換機は 2014 年度（平成 26 年度）に更新を行っており、通信ケーブル・端子盤等についても改修整備に合わせて順次更新を行っているが、老朽化した設備については計画的な更新が必要である。

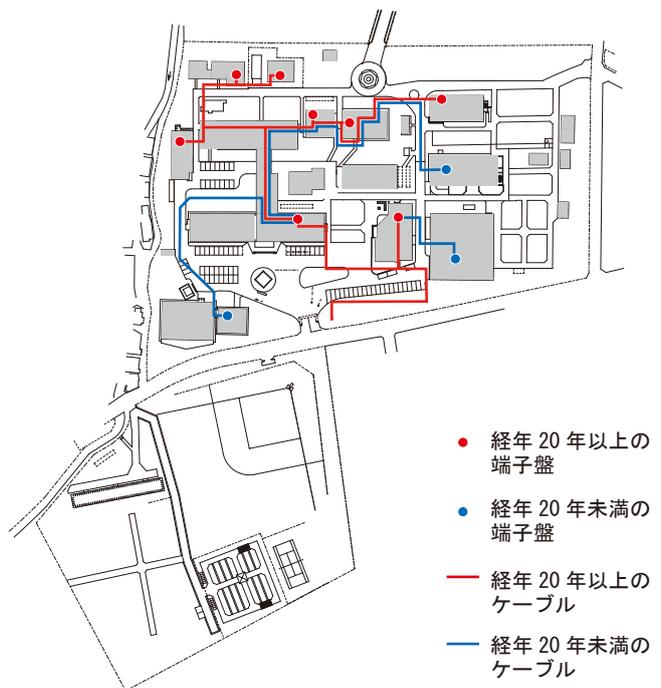


図 2-34 情報通信設備の現状

3) 給水設備

北地区の埋設配管について、経年劣化による漏水の発生や铸铁管、鋼管内の発錆が赤水の発生原因となっている。

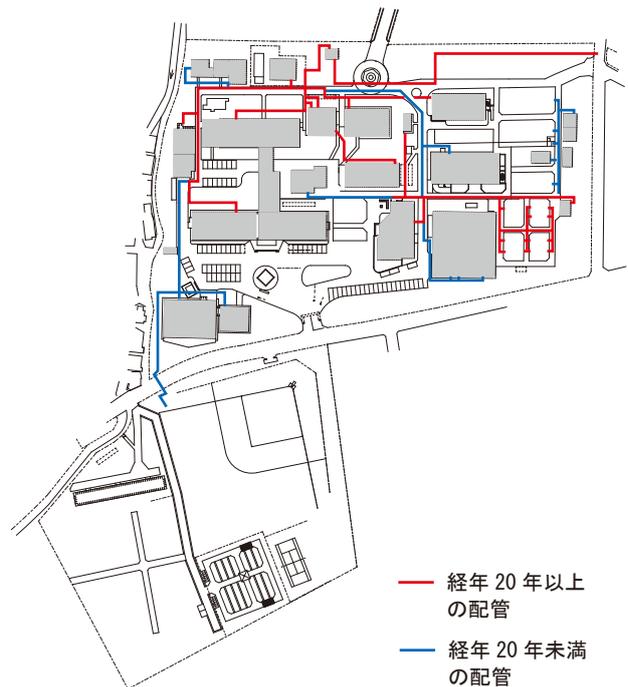


図 2-35 給水設備の現状

4) 排水設備

北地区について、一部の建物廻りは雨水排水が分流化されているが、全般的には分流化されていない。

敷地内の雨水排水が整備されておらず、集中豪雨発生時に、雨水排水の処理ができないため影響がでている。

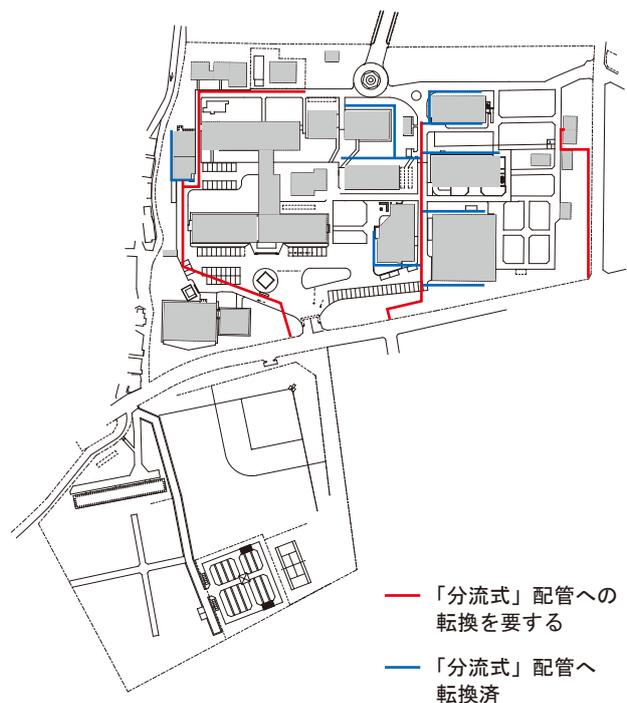


図 2-36 排水設備の現状

5) 都市ガス設備

北地区の埋設配管について、埋設配管全体の約6割が30年以上経過しており、老朽化が進んでいるため、更新を計画する。

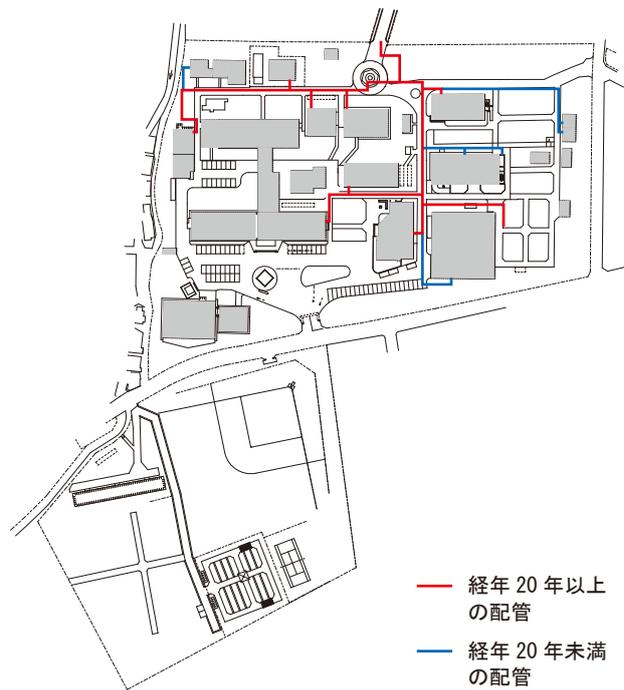


図 2-37 都市ガス設備の現状

6) エレベーター設備

経年11年の機種が1基設置されているが、耐震対策が施されていない。



図 2-38 エレベーター設備の現状

2-1-4 京町キャンパスの現状

(1) 近隣の環境

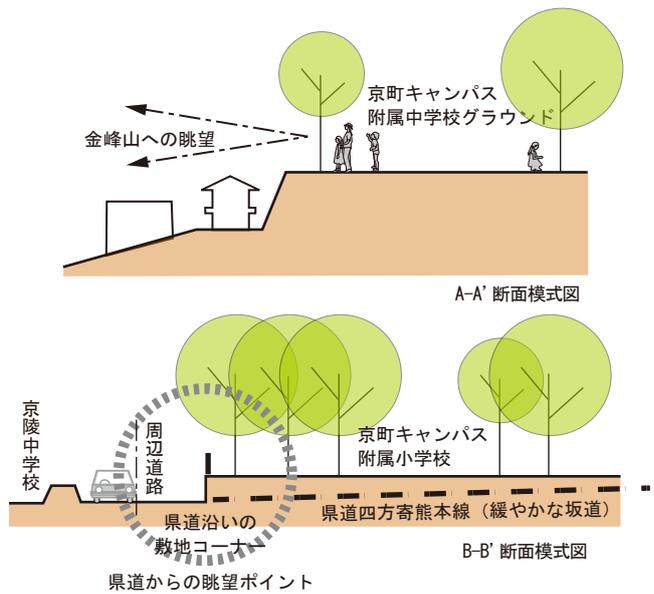
京町キャンパスは、熊本市中心部から1.6km、京町台地上の熊本城の北側に位置し、東に立田山（黒髪キャンパス）、西に金峰山を望む。



図 2-40 近隣の環境

(2) キャンパス周辺との関係

キャンパス東側に旧国道3号の主要幹線道路が走り、南側は熊本市立京陵中学校が隣接している。北側と西側は民地となっている。



(3) 地区の構成

東側が附属小学校ゾーン、西側が附属中学校ゾーンとなっている。

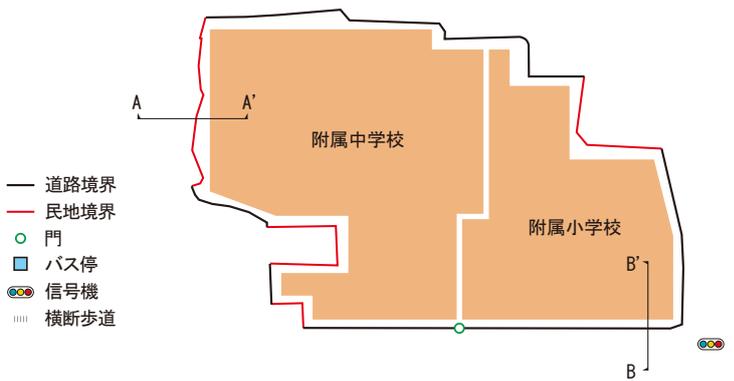


図 2-41 キャンパス周辺と地区の構成

2-1 キャンパスの現状

(4) キャンパスの変遷

熊本大学教育学部の前身である熊本師範学校の校舎は1893年(明治26年)に藪ノ内から現京町キャンパスへ移転し、それに伴い1877年(明治10年)に開校していた附属学校(現附属小中学校の前身)も移転した。1949年(昭和24年)に熊本大学の所管となり1951年(昭和26年)に熊本大学教育学部附属小学校・中学校となった。熊本大学教育学部は1955年(昭和30年)に京町から黒髪キャンパスへ移転し、その跡地に附属小中学校校舎が建設された。

(5) 建物の状況

築50年以上は附属中学校の体育館である。

築30年以上50年未満の建物が全体の76%を占める。築30年以上の附属小学校A棟B棟はGSK工法*である。

(*GSK工法：学校施設建築の頭文字でプレキャスト板の外壁で施工されている。)

改修歴		建築年	経過年 (2015年)	延床面積 ㎡
なし	あり			
■	□	~1925年(T14年)	89年以上	0(0%)
■	□	1957年(S32年)~	50年以上	2,010(15%)
■	□	1965年(S40年)~	40年以上	5,031(38%)
■	□	1975年(S50年)~	30年以上	4,947(38%)
■	□	1985年(S60年)~	20年以上	446(3%)
■	□	1995年(H7年)~	10年以上	78(1%)
■	□	2005年(H17年)~	10年未満	643(5%)

*「改修歴あり」は、外部、内部、耐震のいずれかの大規模改修を実施した建物

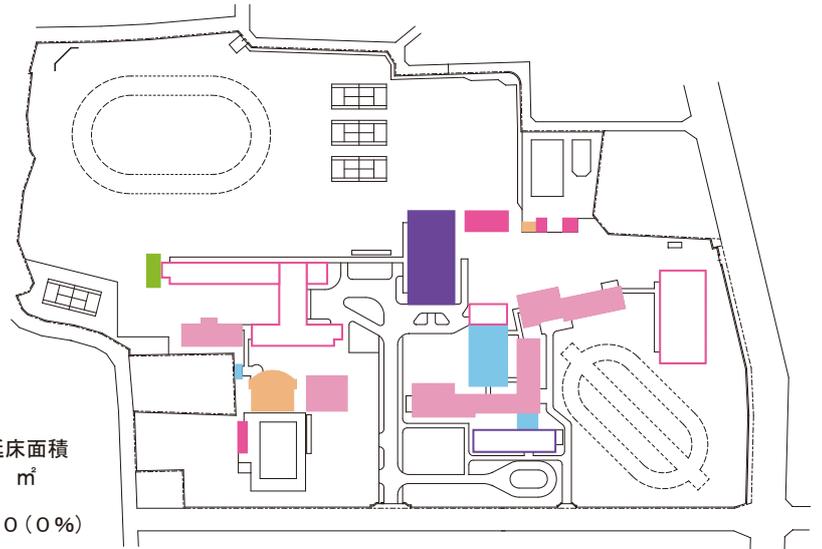
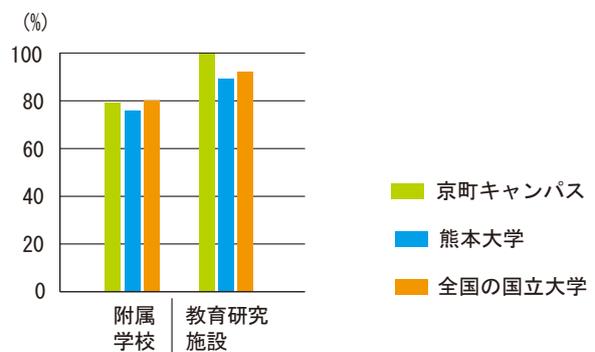


図2-42 建物の建築年と改修歴

京町キャンパスの用途別整備率は、附属学校が100%に達していない。



*必要面積に占める保有面積の割合(平成27年度)

図2-43 整備率

2-1 キャンパスの現状

(6) 交通の現状

全ての立ち入りは門衛のセキュリティを通過するようにしている。

車の動線が駐車場の関係で敷地の東奥まで伸びている（駐車台数 78 台）。

[出入口について]

1) 正門に自動車歩行者の出入りは集中している。アプローチ道路は歩車分離されているが出入口付近で歩道部分が狭く、また全体として歩行者の安全性快適性が十分ではない。

2) 校舎とグラウンドの間の附属小学校出入口は、登校時のみ 8:30 まで開門される（週に 1 回一斉下校の日は下校時も開門）。

3) 県道からの自動車の出入口は工事等の緊急車両の通行のみで平常時は閉門されている。

(7) 緑地・広場の現状

附属小学校にはプレイ広場があり、活発に利用されている。

附属中学校には中庭型の広場があるが室外機群と隣接しており、利用しにくい環境になっている。

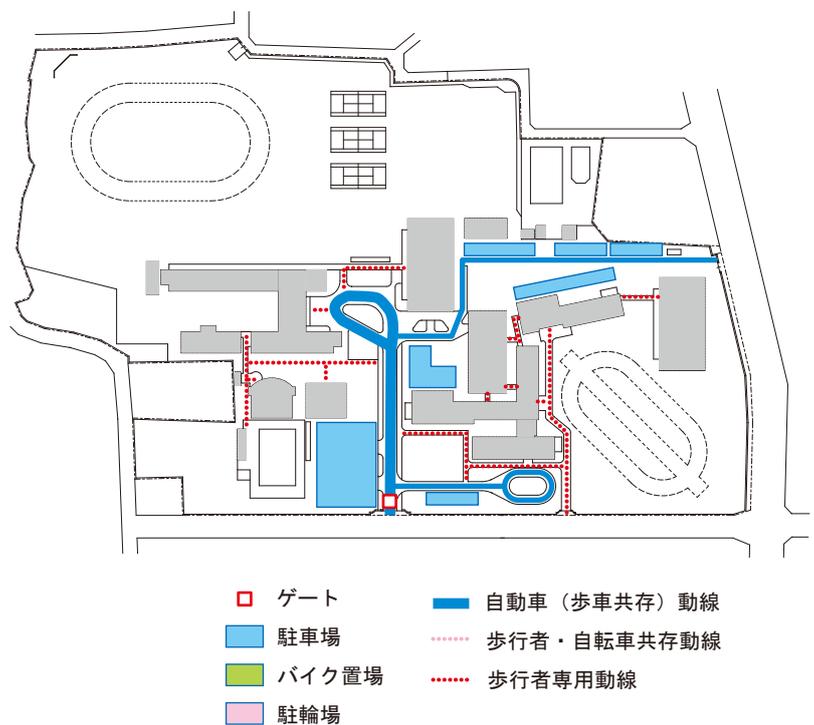


図 2-43 交通の現状

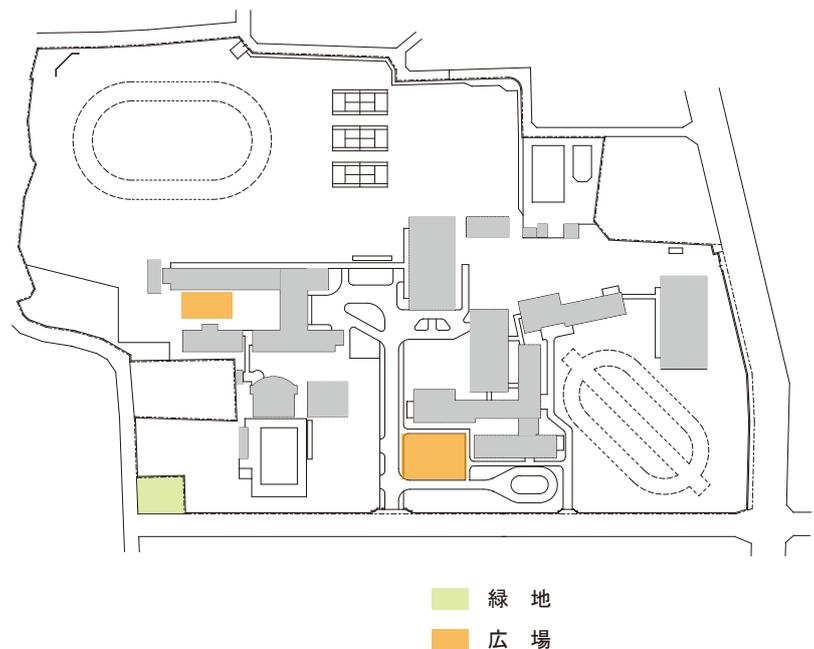


図 2-44 緑地・広場の現状

(8) インフラストラクチャーの現状

1) 電力設備

耐用年数を超過した受変電設備及び高圧ケーブル等については、電力の安定供給のために計画的な更新が必要である。

また、省エネルギー対策として附属小学校校舎A棟と附属中学校校舎にそれぞれ10kWの太陽光発電設備を設置している。

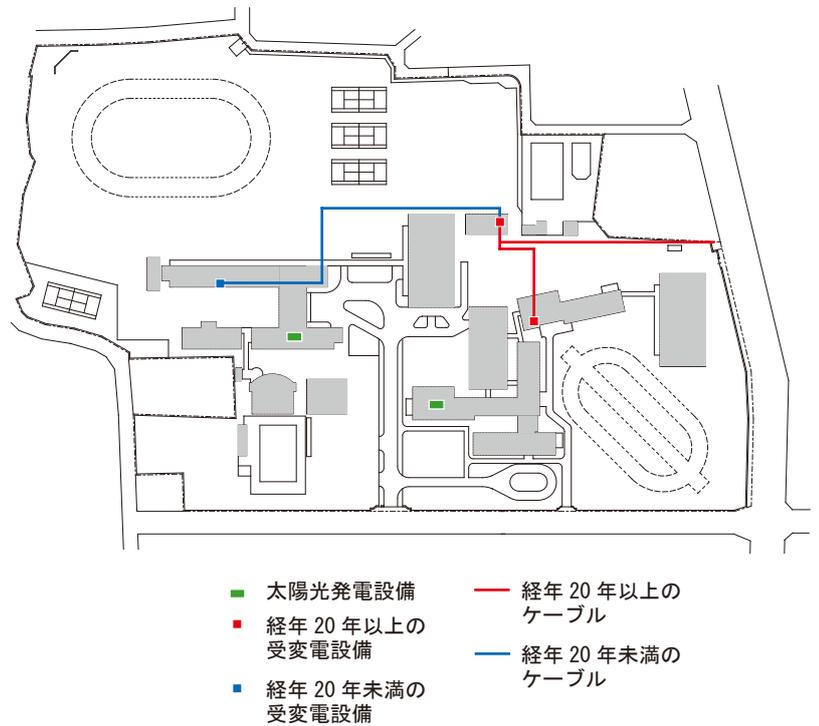


図 2-45 電力設備の現状

2) 電話・情報通信設備

電話交換機は2013年度(平成25年度)に更新を行っており、通信ケーブル・端子盤等についても改修整備に合わせて順次更新を行っているが、老朽化した設備については計画的な更新が必要である。

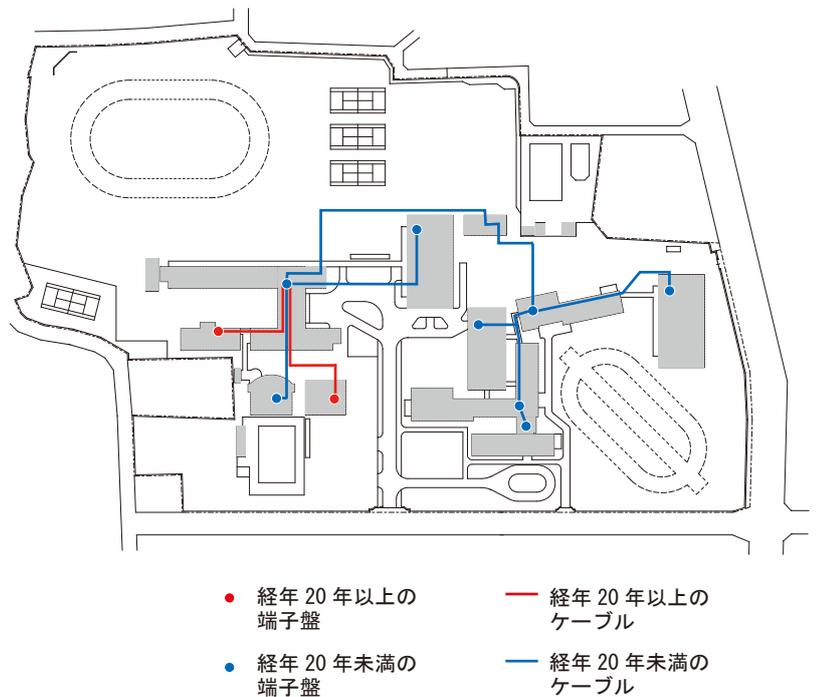


図 2-46 情報通信設備の現状

3) 給水設備

埋設配管について、経年劣化や铸铁管、鋼管の腐食による漏水が度々発生している。

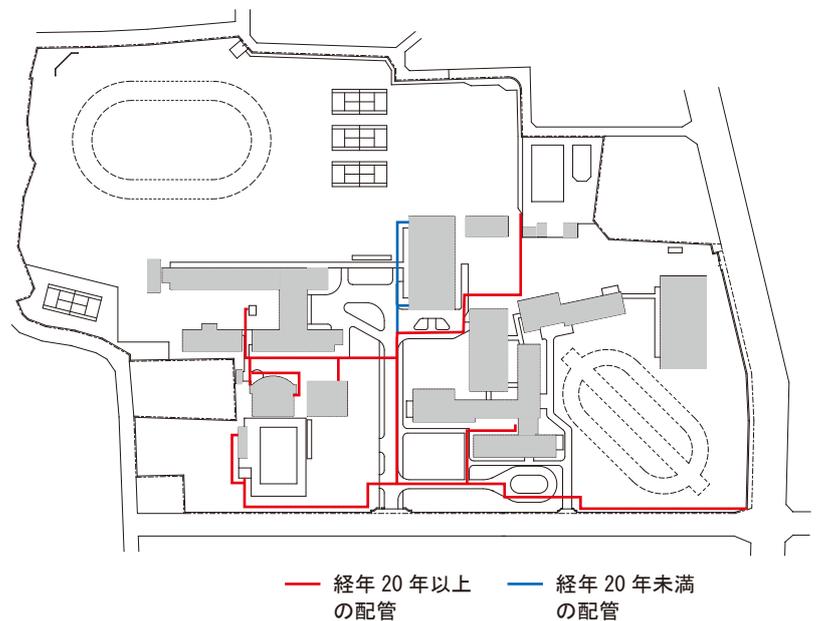


図 2-47 給水設備の現状

4) 排水設備

公共下水道の分流地区となっているため、敷地内排水はすべて雑排水・雨水に分流化されているが、排水管内へ木の根の入り込みや勾配不良により、敷地内の雨水排水が一部滞留する等の影響が出ている。

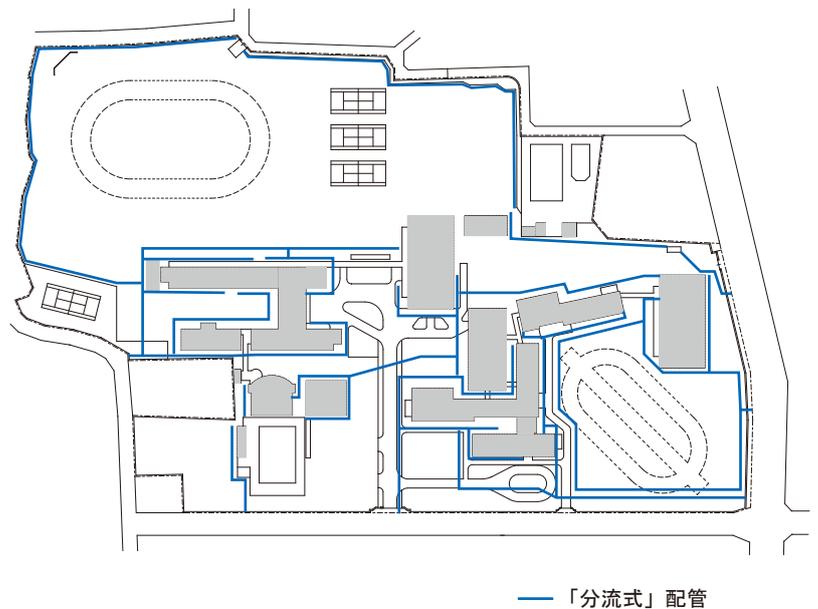


図 2-48 排水設備の現状

2-1 キャンパスの現状

5) 都市ガス設備

埋設配管について、経年劣化や铸铁管、鋼管の腐食によるガス漏れが度々発生している。

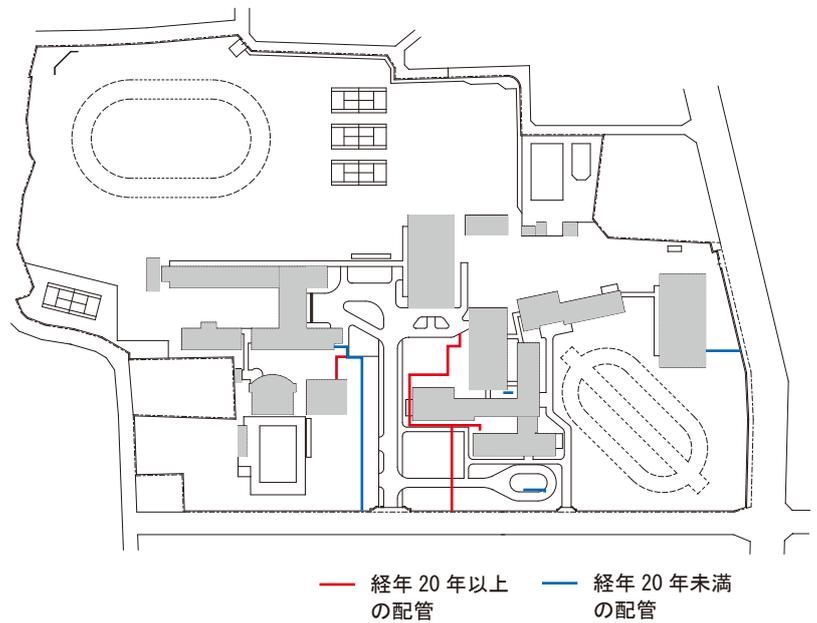


図 2-49 都市ガス設備の現状

6) エレベーター設備

経年 7 年の機種が 2 基設置されているが、耐震対策が施されていない。

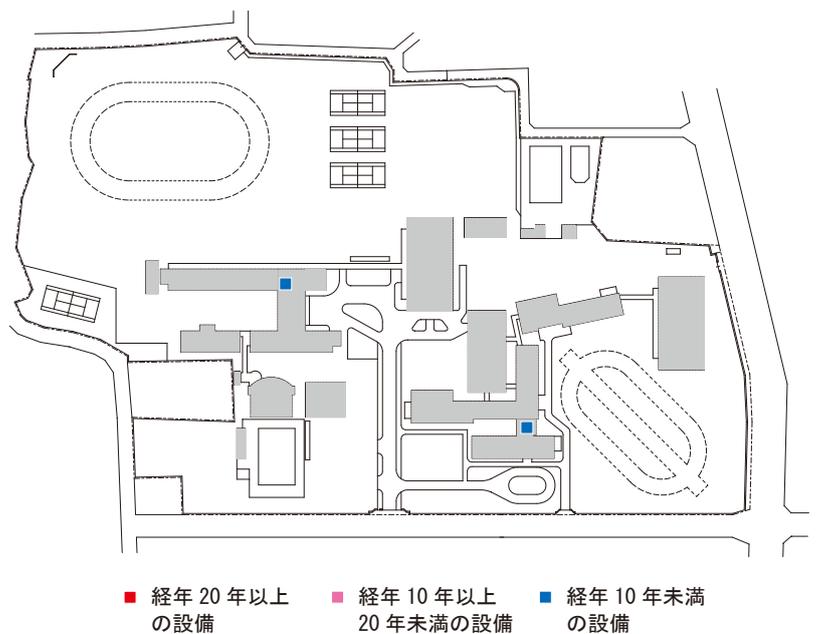


図 2-50 エレベーター設備の現状

2-1-5 城東町キャンパスの現状

(1) 近隣の環境

城東町キャンパスは、熊本市中心部北側に位置しており、西側に坪井川を挟んで熊本城天守閣を望む。東側には上通アーケード、並木坂が近接している。

市電、電鉄藤崎宮前駅、JR 上熊本駅、バスターミナルなど交通の利便性がよい。

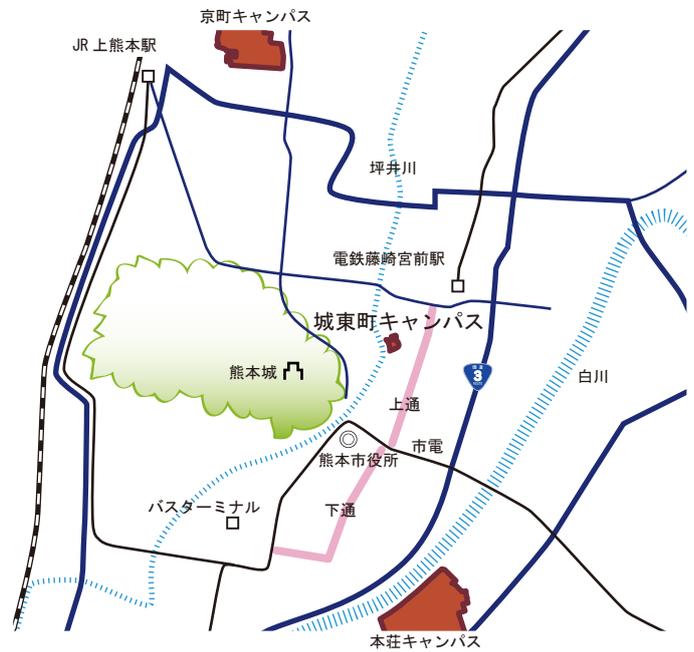
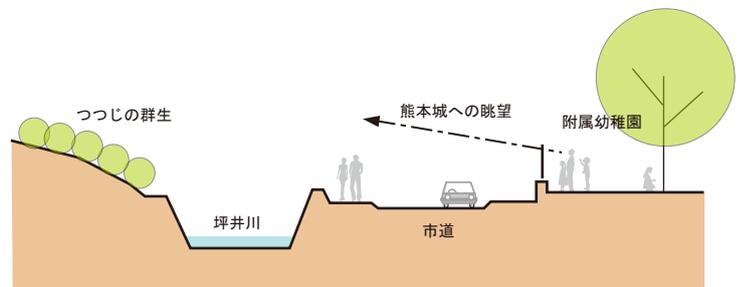


図 2-51 近隣の環境

(2) キャンパス周辺との関係

西側には坪井川、熊本城があり、周辺には、ホテル、マンション、娯楽施設などのビルが立地している。



A-A' 断面模式図

(3) 地区の構成

城東町キャンパスは、附属幼稚園としてのキャンパスである。

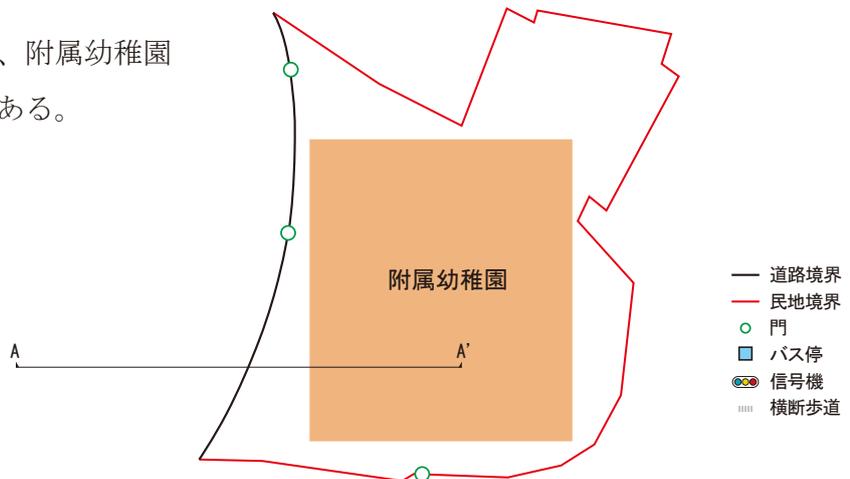


図 2-52 キャンパス周辺と地区の構成

2-1 キャンパスの現状

(4) キャンパスの変遷

附属幼稚園の起源は1915年(大正4年)に開園し同年に熊本県女子師範学校(後に熊本師範学校に併合)の代用附属幼稚園となった熊本市立壺川幼稚園である。その後、代用附属壺川幼稚園は1931年(昭和6年)に他の幼稚園と合併し千葉城幼稚園となり同年現在地に移転した。1951年(昭和26年)、師範学校が国立大学へ移行し熊本大学教育学部附属幼稚園となった。

(5) 建物の状況

築40年以上の園舎は、すべて改修済みである。

改修歴		建築年	経過年 (2014年)	延床面積 ㎡
なし	あり			
■	□	~1925年(T14年)	89年以上	0(0%)
■	□	1957年(S32年)~	50年以上	0(0%)
■	□	1965年(S40年)~	40年以上	1,083(90%)
■	□	1975年(S50年)~	30年以上	0(0%)
■	□	1985年(S60年)~	20年以上	0(0%)
■	□	1995年(H7年)~	10年以上	0(0%)
■	□	2005年(H17年)~	10年未満	116(10%)

*「改修歴あり」は、外部、内部、耐震のいずれかの大規模改修を実施した建物

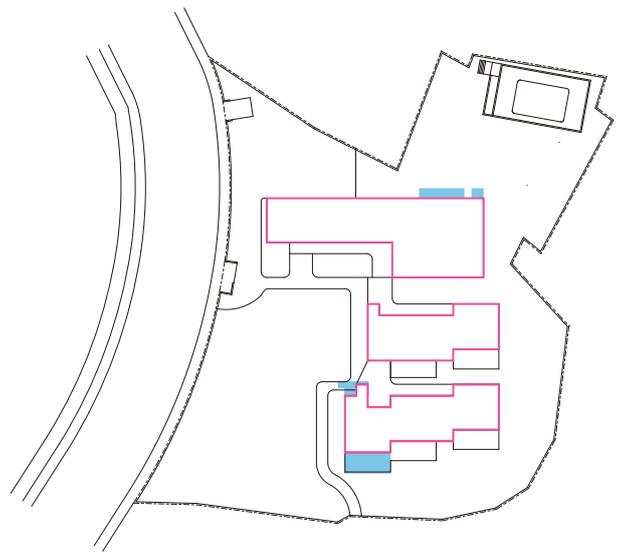
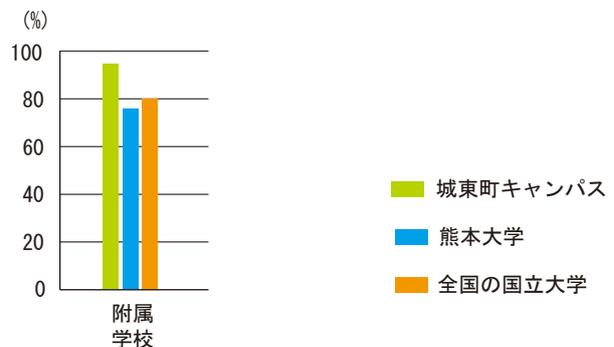


図 2-53 建物の建築年と改修歴

城東町キャンパスの整備率は、100%に達していない。



*必要面積に占める保有面積の割合(平成27年度)

図 2-54 整備率

2-1 キャンパスの現状

(6) 交通の現状

車は北側の門でセキュリティをかけて出入りしている。(駐車台数15台)

2つの門の間に駐車場と駐輪スペースを設置し、その他の外構は基本的に園児の遊び場となっている。

[出入口について]

1) 坪井川側の正門は歩行者のみの出入口である。現状で排水にやや問題はあるが門の周辺にたまり場もあり環境は良好である。

2) 自動車は北側の門から出入りしている。通常閉門されていて、出入時のみ開門される。出入口と駐車場の間に余裕がなく駐車場は狭いために入庫に不便を生じている。

3) 南側周辺道路への出入り口は緊急避難口であり、常時閉鎖施錠されている。

(7) 緑地・広場の現状

シンボル樹として、大楠が園の中央にある。

広場として、運動場と児童室跡地が利用されている。

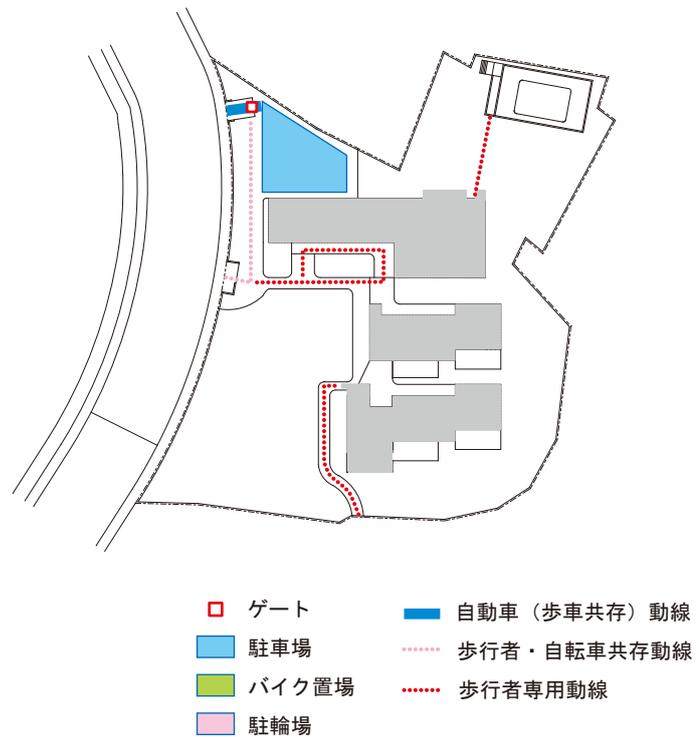


図 2-55 交通の現状

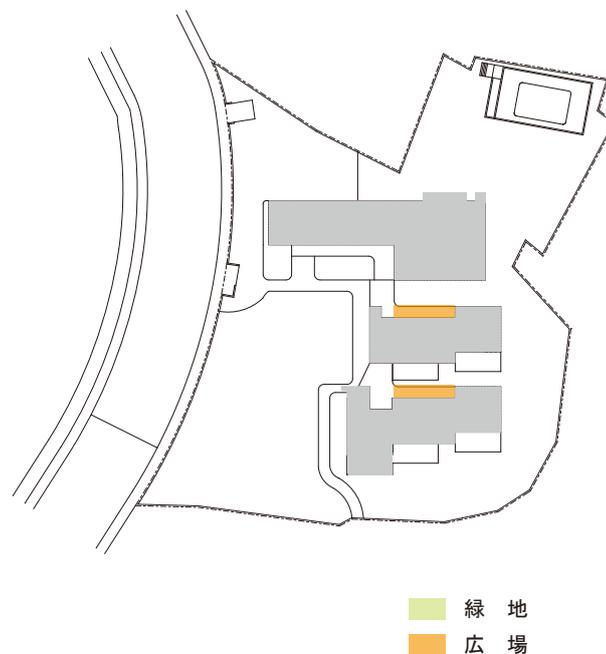


図 2-56 緑地・広場の現状

(8) インフラストラクチャーの現状

1) 電力設備

電力設備については、2013年度（平成25年度）の全面改修に伴い更新は完了している。

また、省エネルギー対策として10kWの太陽光発電設備を設置している。

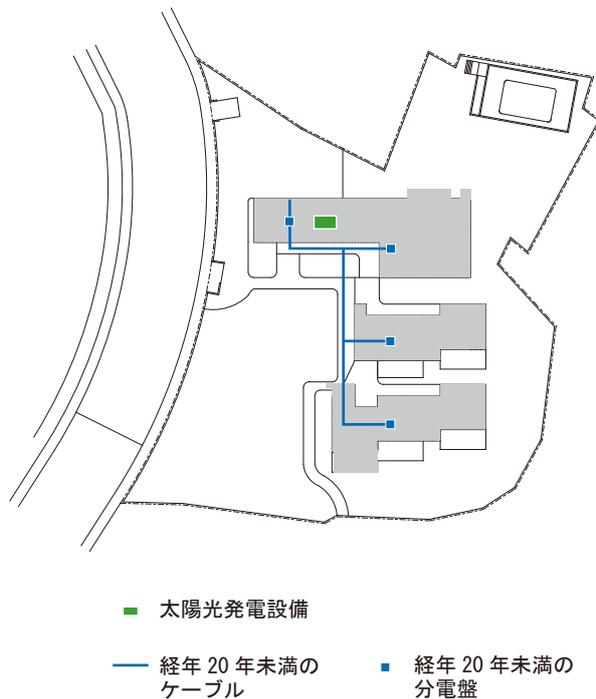


図 2-57 電力設備の現状

2) 電話・情報通信設備

電話・情報通信設備についても、2013年度（平成25年度）の全面改修に伴い更新が完了している。

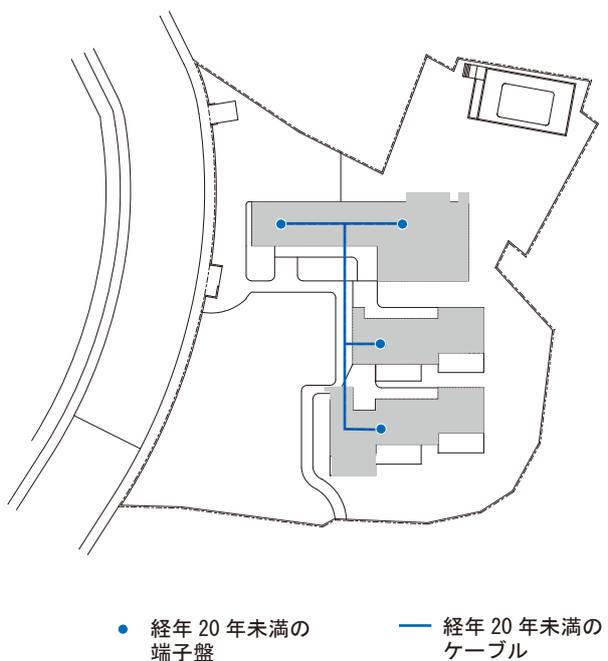


図 2-58 情報通信設備の現状

3) 給水設備

敷地内埋設配管について、プール廻りを除きすべてポリエチレン管へ更新が完了している。

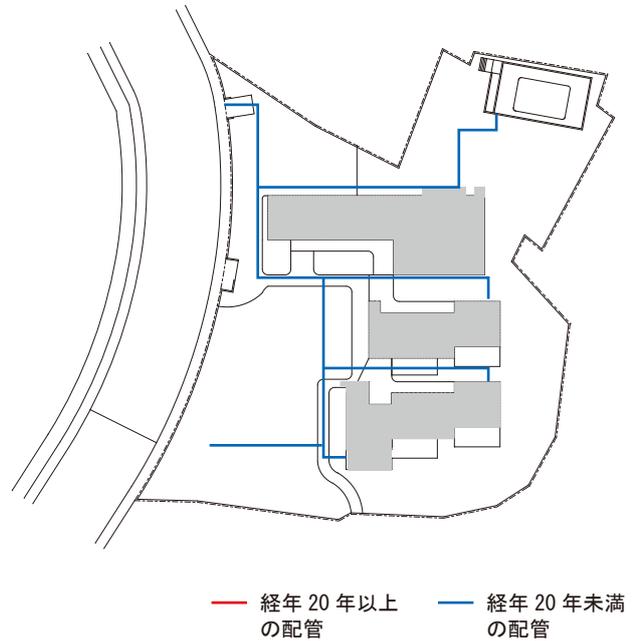


図 2-59 給水設備の現状

4) 排水設備

敷地内配管について、プール廻りを除きすべて雑排水・雨水の分流化を完了している。

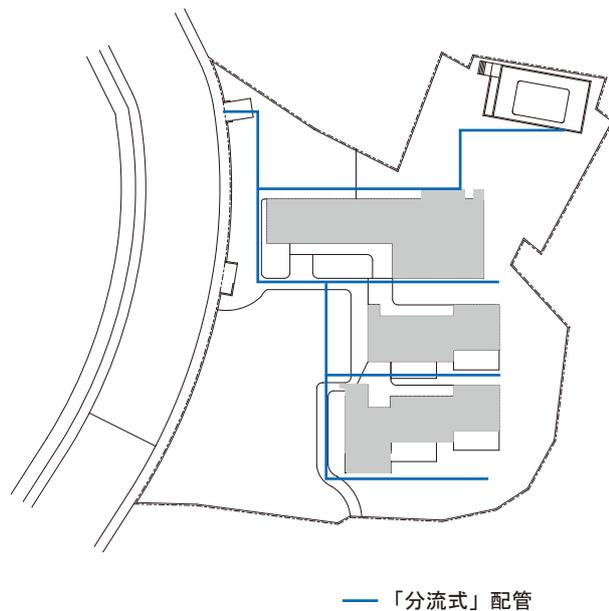


図 2-60 排水設備の現状

5) 都市ガス設備

敷地内埋設配管について、すべてポリエチレン管へ更新が完了している。

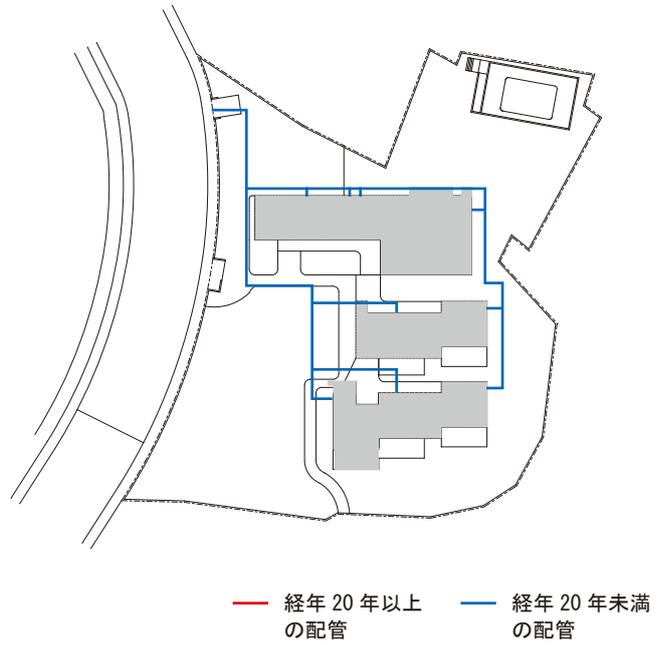


図 2-61 都市ガス設備の現状

2-2 キャンパスの課題

各キャンパスの課題を導くために、フレームワークプランの全学に共通する整備方針「FICSS5 (①Flexibility、②Identity、③Community、④Safety、⑤Sustainability)」に則して、現状と課題について整理する。

2-2-1 黒髪キャンパスの課題

(1) Flexibilityの視点

1) 施設の有効利用の促進

現 状：

学内における教育や研究手法の変化、学外も対象としたカンファレンスの開催、社会人や留学生の受入など施設の利用形態が多様化している。

ニーズに応じた教室や会議室、ホール等が求められるが、稼働状況にばらつきがみられ適時かつ適当な規模で確保することが難しい状況である。

施設の整備については、特に図書館の整備率が低い。

課 題：

施設の柔軟な利用を可能にするため、室の用途転用や可変性・多目的性を実現するためのハード整備と、カリキュラムの検討や部局間での共同利用、デッドスペースの有効活用等を実現するためのソフト整備を組み合わせ、学内の施設・スペースの配分の最適化を図ることが課題である。

2) 情報通信設備の更新

現 状：

無線LAN基地局の増設、LAN支線のギガビット化等の整備を完了しているほか、シングルサインオン(統合認証)等を実施している。

情報通信技術の急速な発展により、無線LANの普及や携帯端末によるインターネット接続といったインフラ面の変化が生じている。

課 題：

今後ますます進化する情報システムを大学単体で構築・メンテナンスするには負担が過大になる可能性もあり、情報技術について外部と連携することが課題である。

また、Web2.0やクラウド等の新たな概念も生まれ、情報セキュリティに対するより強固な対策が求められている。

(2) Identity の視点**1) 個性的でシンボリックな景観の形成****現 状：**

並木や大木の緑が残り四季折々の風情を見せる自然と、国の重要文化財である五高記念館をはじめとする歴史的施設が存在する。

しかしながら、大学を象徴するような景観の形成には至っていない。また、自転車の放置、バックヤードへの備品の放置、景観を損ねる屋外掲示、鬱蒼とした樹木、整備済みの建物と未整備の建物の不調和な景観が存在する。

課 題：

歴史的資源を有し、自然環境に囲まれたキャンパスの特性を活かし、学都熊本を代表するキャンパスとして、都市イメージと呼応する景観を創出するとともに、学内はもとより地域住民や市民にも親しまれる景観を形成することが課題である。



季節感を感じる銀杏

2) 質が高く居心地の良い環境の形成**現 状：**

南地区の再開発が完了し施設の更新による機能の充実が図られ、屋外スペースにもベンチが配置されている。北地区では教育学部と文・法学部間の前庭のリニューアルが学生の屋外アメニティスペースとして整備されている。

一方で、長年のキャンパス形成の過程における建物の増設や、キャンパス全体に点在する駐車場及び路上駐車による車の占有、自転車の放置等により、屋外環境の質が低下している。

課 題：

歩行者にとって優しい環境を形成するため人と車の動線に留意し、歴史的な資源を景観形成に取り入れながら、緑地を活かした質が高く居心地の良い外部環境を整備することが課題である。



アゴラ広場

(3) Community の視点**1) 交流の場の創出****現 状：**

キャンパスの屋内外に学生のリフレッシュスペースや黒髪南C1（共用棟黒髪7）の1階にあるルポゼのような滞留施設、屋外のポケットパーク的な溜り場を整備している。

これまで、来訪者を案内・誘導するためのサイン整備や、熊本市との協定に基づき、被災時を想定した避難施設として体育館の改修を実施した。



黒髪南C1（1階：ルポゼ）

課 題：

充実したキャンパスライフを享受するための、快適な交流の場を引き続き整備し、拡充することが課題である。

学びたいキャンパス、訪れたいキャンパスとなるため、大学情報の発信、学外者に関われ、滞留可能な交流の場の提供などにより、地域とのつながりが深く、親しまれる大学を目指す必要がある。

2) グローバル化への対応**現 状：**

大学間交流協定校は21か国1地域(2014年(平成26年)5月)にのぼり、研究者や留学生の受入が増えている。

多文化圏から人材を受け入れるための基盤整備が十分ではない。

課 題：

多言語のサイン、留学生の宿舍、居場所づくり、宗教への対応など、大学生活を維持するための支援が必要である。

さらに、国際共同研究の拠点的施設となりうる機能強化も課題である。

(4) Safety の視点**1) 安全安心な環境の実現****現 状：**

構造体の耐震補強は2015年度(平成27年度)までに完了したが、国指定重要文化財(建造物)は現行法令の耐震性能が確保されていない。

防犯面では、セキュリティレベルの高いカードキーへの移行を講じており、建物のセキュリティについては対応が進んでいる。

電気設備、電話設備、給水設備、排水設備、ガス設備のインフラストラクチャーは老朽化が進んでいる。

課 題：

安全面では、国指定重要文化財(建造物)の耐震化やインフラストラクチャー整備のほか、実験に関連する安全管理、防犯面ではセキュリティや夜間の治安等の確保が必要である。また、安心して施設を利用するために身障者、外国人への対応、ユニバーサルデザインの導入、来訪者への案内等の充実が課題である。

2) 歩車分離・歩車共存の環境整備**現 状：**

車への依存度が高い地域性と膨大な自転車への対応が対症療法的な措置となってきた経緯があり、駐車場と駐輪場が散在するとともに各動線が入り組んでいる。また、駐輪場は、各部局の改善対応に一定の効果があがっているが、一部の施設では満足度が相対的に低い結果もでている。

2-2 キャンパスの課題

車と自転車の存在は、黒髪キャンパスの特徴である歴史的・自然的景観にも影響を与えているばかりでなく、歩行者の安全性が確保できていない側面をもっている。

課 題：

キャンパス内を回す自動車動線の整理と駐車場・駐輪場の適正配置により、歩車分離・歩車共存の良質な道路環境を実現する必要がある。駐輪場は、全体での整備を実施し、質・量ともに改善することが課題である。

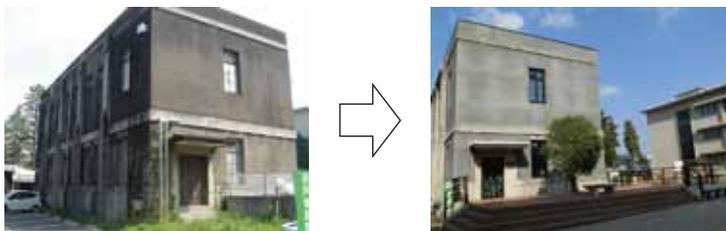
(5) Sustainability の視点**1) 施設の継続的な維持管理****現 状：**

経年に伴う施設の老朽化の進行や、キャンパス内の空地が減少し建て詰りが生じている。

課 題：

築20年以上50年未満の建物約10万5千㎡のうち、未整備の建物が順次老朽化改善整備の対象になってくるため、耐震改修の完了後は施設の老朽化対策に軸足を移していくが、老朽化対策を実施しながら、現状を把握し、検証評価から早期改善もしくは予防保全に結びつけ、施設の延命と維持管理コストの低減に努めることが課題である。

また、災害に強く、安定的なライフラインを実現することが課題である。



黒髪南C1の改修前(写真左)と改修後

2) 環境対策の推進**現 状：**

教育研究をはじめ本学のあらゆる活動及び運営において、地球温暖化防止策の推進、エネルギー使用における化石燃料依存の削減、廃棄物発生量の削減、化学物質の安全管理、環境汚染の予防、グリーン購入の促進及び資源のリサイクルの向上に努めている。

課 題：

環境目標を設定し、教職員、学生、生徒、児童及び熊本大学内で事業活動を営む団体等の職員が一体となり、環境関連の諸法令、諸規則及び学内規定等を遵守すると共に環境保全活動を推進することが課題である。

2-2 キャンパスの課題

2-2-2 本荘キャンパスの現状と課題

(1) Flexibility の視点

1) 施設の有効利用の促進

現 状 :

病院再開発整備に伴い中地区から北地区に再整備したことで、南地区にある楷樹会館(学生食堂含む)までの移動が難しくなっており、北地区外来者及び学生・教職員の食堂問題や、楷樹会館上階の利用率低下が問題となっている。

北地区の看護師宿舎は入居率が低くなっている。また、留学生用の宿舎や外国人研究者用の短期宿泊施設が不足している。

移転後の本荘中4(旧医学部講義棟)が中地区に残置されている。また、来学者等が利用する多目的ホールのニーズがある。

課 題 :

北地区外来者及び学生・教職員の福利サービスを充実させるため、学内外者が多人数収容できる食堂を北地区で確保することが課題である。

低未利用施設については、部局間を通じて有効活用策を検討し、利用促進やニーズに応じた改修を進めることが課題である。

(2) Identity の視点

1) 個性的でシンボリックな景観の形成

現 状 :

病院再開発整備の完了が近く、今後は北地区及び中地区の南北シンボル軸の整備を含む外構の環境整備を進める。

駐車場不足を解消するための整備が個別的な対応に陥ると、全体的な景観の秩序が混乱しかねない。

キャンパスの周縁部には大木があり、緑豊かな景観を形成している。

課 題 :

医学部、附属病院、各種センターとしての風格ある景観形成に向けた全体像の共有を図ることが課題である。

シンボル軸の整備とともに、歩行者の出入口について玄関口としてふさわしい景観整備を行うことが課題である。

緑豊かで個性的な景観維持のためには、大木の剪定などの定期的な管理と、今後の広場整備も含めた緑化ネットワークの形成によって新たな景観形成を図ることが課題である。

2) 質が高く居心地の良い環境の形成

現 状：

北地区の北側や中地区の南側など、敷地周縁部の主要動線上にゴミ置場等のバックヤードが視野に入る。

北地区の北側に位置する白川（一級河川）の護岸環境整備が進んでいる。

課 題：

主要動線上のバックヤードは、景観的な配慮を施すことが課題である。

外部空間である白川との連携により憩いの場所としてのアメニティ空間の広がり的形成することが課題である。

(3) Community の視点

1) 交流の場の創出

現 状：

病院再開発整備の進行に伴い、北地区の前庭整備（コア構想）が進んでいる。

南地区のグラウンドを暫定駐車場としたことで、課外活動に支障をきたしている。

課 題：

メイン広場のほか、今後のキャンパス整備を展開する過程で、外部空間における憩いのスペースを積極的に導入することが求められている。

駐車場問題を早期解決しグラウンド利用に戻すことが課題である。

2) グローバル化への対応

現 状：

留学生や外国人研究者のための宿舎は、日本人学生宿舎や留学生会館がある宇留毛地区では遠すぎて不便であり、近隣での確保に苦労している。

課 題：

留学生や外国人研究者の宿舎を整備することが課題である。

(4) Safety の視点

1) 安全安心な環境の実現

現 状：

看護師宿舎の整備をもって耐震改修は完了した。また、身障者の受け入れに向け、保健学科へのエレベーターの設置を完了した。

熊本市との協定に基づき、被災時を想定した避難施設として本荘体育館の改修を完了した。

特に南地区は女子学生が多く、夜間の移動もあるため、セキュリティの強化に対するニーズが強まっている。

課 題：

被災時のソフト面でのフォローアップが求められている。

セキュリティの強化に向けた対策が課題である。

2) 歩車分離・歩車共存の環境整備

現 状：

北地区の立体駐車場整備で、入庫待ちの滞留による渋滞は相対的に緩和したが、慢性的な駐車場不足への解決には至っていない。また、南地区のグラウンドを暫定駐車場として使用していることで局所的な交通負荷がかかっている。

一部、車動線と歩行者動線が接近している箇所が存在する。

南地区は、駐車場と近隣住宅が至近にある箇所があり運用に留意している。

課 題：

駐車場について本荘キャンパス全体での計画が必要であり、台数や配置、動線のほか、運用方法に関する検討が課題である。

歩行者の安全を確保するための対策が課題である。

病院については、患者用車動線の分離のほか、車の交通負荷を低減させ、患者の円滑な来院を促すための対策が課題である。

(5) Sustainability の視点

1) 施設の継続的な維持管理

現 状：

病院再開発整備を完了し、建て替え以外の老朽建物に対して計画的な改善を実施している。

医療及び研究の進化が早く、新たな施設への将来ニーズを予測しにくい状況である。

課 題：

早期改善や予防保全による施設の延命に取り組み、維持管理コストの低減を図ることが課題である。

現時点で余裕のある面積を確保しておくとともに、将来の建替え余地としてエクステンション用地を確保しておくことが課題である。

2) 環境対策の推進

現 状：

教育研究をはじめ本学のあらゆる活動及び運営において、地球温暖化防止策の推進、エネルギー使用における化石燃料依存の削減、廃棄物発生量の削減、化学物質の安全管理、環境汚染の予防、グリーン購入の促進及び資源のリサイクルの向上に努めている。

課 題：

環境目標を設定し、教職員、学生、生徒、児童及び熊本大学内で事業活動を営む団体等の職員が一体となり、環境関連の諸法令、諸規則及び学内規定等を遵守すると共に環境保全活動を推進することが課題である。

2-2-3 大江キャンパスの現状と課題

(1) Flexibility の視点

1) 施設の有効利用の促進

現 状：

図書館の時代に合った機能等が不十分であり、自習スペースの不足が生じている。
南地区の白山宿舎の入居率が低い。

課 題：

キャンパス内の施設において、スペースを再配分し最適化を図ることが課題である。
白山宿舎の有効活用策を講じることが課題である。

(2) Identity の視点

1) 個性的でシンボリックな景観の形成

現 状：

北側の電車通りからのアプローチ道は整備を完了している。
宮本記念館の横に仮設的なゴミ置場がある。敷地周縁部の大木はシンボリックな景観を
創り出している一方で、枝や落ち葉は周辺道路や民地に影響を及ぼす。

課 題：

北地区・南地区の出入口の景観整備に配慮し、特に北門からのアプローチはサインなど
ゲート性を高めた整備を施すことが課題である。

シンボル樹や宮本記念館のほか薬用植物園を考慮した市民にも親しまれる景観形成を図
ることが課題である。

2) 質が高く居心地の良い環境の形成

現 状：

大江E2（機器分析施設）壁面のツタ類の放置、自転車の放置、敷地境界の柵の老朽化
など細かい部分で管理が行き届いていない箇所が見受けられる。

課 題：

緑や設置物等に対して、きめ細かな手入れ・管理を施すことが課題である。

(3) Community の視点

1) 交流の場の創出

現 状：

ポケットパークへのベンチの設置を完了している。
薬用植物園を一般開放しており、小径ルートでキャンパス内を散策することができる。
新たに「薬草パーク構想」というプロジェクトを展開している。

課 題：

北地区において、施設の屋内外を問わず、交流の場を付加することが求められている。
今後は薬草パーク構想に基づき整備を進めることが課題である。

2) グローバル化への対応

現 状 :

本荘キャンパス同様、留学生のための宿舎が不足している。

課 題 :

近距離にある本荘キャンパスとあわせた留学生対策を講じることが課題である。

(4) Safety の視点

1) 安全安心な環境の実現

現 状 :

すべての施設の耐震改修を完了している。熊本市との協定に基づき、被災時を想定した避難施設として大江体育館の改修を完了した。

北側アプローチ道は大学の私有地だが周辺民家へのアプローチ道となっており違法駐車が見受けられる。

課 題 :

被災時のソフト面でのフォローアップが求められている。

緊急車両の進入に支障をきたさないための措置が必要である。

2) 歩車分離・歩車共存の環境整備

現 状 :

駐車場が不足しているため、緑地への駐車を行っている。薬用植物園への一般の来訪もある。

駐輪場の老朽化が見受けられる。

課 題 :

駐車スペースへの適切な誘導が課題である。また、駐輪場を改善し自転車の誘導も課題である。

(5) Sustainability の視点

1) 施設の継続的な維持管理

現 状 :

北地区は建て詰まりを生じている。

課 題 :

次期建替えに向けた移転余地の確保が課題である。

2-2-4 京町キャンパスの現状と課題

(1) Flexibility の視点

1) 施設の有効利用の促進

現 状：

テニスコート跡などキャンパス西側の土地利用が有効活用されていない状態である。

課 題：

土地利用計画を検討し、土地の有効利用を図ることが課題である。

(2) Identity の視点

1) 個性的でシンボリックな景観の形成

現 状：

ゲートからの南北軸は、メインアプローチとしては無機質な空間になっている。

メインアプローチの東側(附属小学校南側)の前庭に記念碑等が集積している。同西側(附属中学校南側)は砂利敷の駐車場がある。

課 題：

ゲートからのメインアプローチ道(南北軸)の景観整備及び附属小学校前庭から駐車場にかけての景観への配慮が課題である。

2) 質が高く居心地の良い環境の形成

現 状：

京町台地という歴史的な地形に立地する。

課 題：

台地からの眺望を活かした景観整備を実施することが課題である。

(3) Community の視点

1) 交流の場の創出

現 状：

中庭に空調用室外機が集中しており、隣接する音楽堂の横には落ち葉置場があるなど快適な利用を促す環境にない。

課 題：

快適なオープンスペースを確保することが課題である。

(4) Safety の視点

1) 安全安心な環境の実現

現 状 :

セキュリティ上、附属小・中学校の出入口は1箇所限定している。
熊本市との協定に基づき、被災時を想定した避難施設として附属小学校体育館の改修を完了した。

課 題 :

構内のバリアフリーが不十分であるため改善に取り組むことが課題である。
被災時のソフト面でのフォローアップが求められている。

(5) Sustainability の視点

1) 施設の継続的な維持管理

現 状 :

運動場の排水が悪く、プール及び附属中学校体育館の機能が不十分である。

課 題 :

武道館の新設が課題である。
テニスコート及び屋外バスケットコート整備へのニーズも含め、計画的な施設の整備・改善を実施することが課題である。

2-2-5 城東町キャンパスの現状と課題

(1) Flexibility の視点

1) 施設の有効利用の促進

現 状 :

収納スペースの不足や教育カリキュラム上の半屋外空間の確保が必須であるため整備が急務である。

課 題 :

要望の高いアートルームを新設する場合は、収納スペース、保護者待機スペース、落ち葉等清掃ゴミの一時保管場所、プールへの動線等に関して、再度十分な協議を経て整備することが課題である。

(2) Identity の視点

1) 個性的でシンボリックな景観の形成

現 状 :

大楠は卒園生が見に来るなどシンボル性の高い資源である。

課 題 :

大楠は、高さ、樹径ともに大きいため、計画的な管理が課題である。

2) 質が高く居心地の良い環境の形成

現 状 :

坪井川沿いに望む熊本城(天守閣)への借景が美しい。

課 題 :

視点場を想定した憩いの場の設置も望まれる。

(3) Community の視点

1) 交流の場の創出

現 状：

プレイルーム跡地が未利用地になっているが、サッカー等の良い遊び場として機能している。

課 題：

保護者の待機スペースがないが、前述のートルームの要望とあわせて検討することが課題である。

(4) Safety の視点

1) 安全安心な環境の実現

現 状：

防犯カメラを2箇所を設置しているが、キャンパス周辺にマンションや娯楽施設等が隣接しているためトラブル事案も発生している。

課 題：

引き続き園児の安全確保のためのセキュリティに配慮することが課題である。

2) 歩車分離・歩車共存の環境整備

現 状：

車専用出入口の整備が完了している。

避難経路でもある南門は、日常的な教職員の利用があるが、すぐにツタが繁るため歩行経路の確保に支障をきたす恐れがある。

課 題：

南門は、避難経路としての機能を確保するために管理しておくことが課題である。

(5) Sustainability の視点

1) 施設の継続的な維持管理

現 状：

全ての老朽化改善・改修を完了した。

課 題：

次期建替えまで長く維持するための保全に努める。軽微な改善点は当局と協議しながら適宜対応し、園児の保育環境を維持することが課題である。

2-3 キャンパス整備の課題と方向性

ここでは、上位計画より与えられた前提条件（1章）と、キャンパスの現状と課題（2章）から、3章キャンパスマスタープランの基本目標・基本方針を導くための「キャンパス整備の方向性」を取りまとめる。

フレームワークプラン 2011

FWP の整備方針 FICSS 5
の各視点からみた課題

①Flexibility

変化への柔軟性

①Flexibility の視点から

- ・ 施設の有効利用の促進
- ・ 情報通信設備の更新

②Identity

個性あるキャンパス環境の創造

②Identity の視点から

- ・ 個性的でシンボリックな景観の形成
- ・ 質が高く居心地の良い環境の形成

③Community

未来志向の教育研究を創出する交流の促進

③Community の視点から

- ・ 交流の場の創出
- ・ グローバル化への対応

④Safety

安全・安心な環境の確保

④Safety の視点から

- ・ 安全安心な環境の実現
- ・ 歩車分離・歩車共存の環境整備

⑤Sustainability

持続的な発展可能性

⑤Sustainability の視点から

- ・ 施設の継続的な維持管理
- ・ 環境対策の推進

FICSS 5 の基本方針

未来志向の学術研究拠点形成のための基盤づくり
学都熊本を牽引する個性と創造性のあるキャンパス形成
サステイナブル社会のモデルとなるキャンパス機能強化

キャンパスの備えるべき環境

整備の方向性

研究拠点大学としての環境

- ・ 世界最先端に準ずる国際共同研究の拠点的施設の整備
- ・ 各学部の先端的研究施設の充実
- ・ 地域の人材育成機能の環境整備

快適な学園生活の環境

- ・ 急激な社会情勢の変化や多種・多様な社会的ニーズに対応できる教育研究施設の整備
- ・ 全学共同利用スペースの拡充
- ・ 教育研究を活性化できる国際交流の場の確保
- ・ 附属図書館等の供用施設を中心とした学修スペース等の確保
- ・ 多様なニーズやライフスタイルに対応する福利厚生施設の充実
- ・ 男女共同参画を推進する施設環境の充実
- ・ 経年劣化・機能劣化した施設・設備の再生
- ・ 災害に強く、安定的な支援が可能なライフラインの再生
- ・ 省エネ・環境負荷軽減など環境対策の推進
- ・ 情報化の推進、セキュリティの強化

地域交流・国際交流の環境

- ・ 地域の文化的資産である重要文化財をはじめとする歴史的建造物を中心としたシンボルゾーンの形成
- ・ 留学生や来学者に対応した環境整備
- ・ 周辺地域と良好な環境をつくり出すバッファゾーンの整備
- ・ 地域交流と地方創生につながる整備
- ・ 地域の福祉と健康への貢献につながる整備